

人文資料形成史における博物館学的研究Ⅱ

—根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開—

2022

近代博物館形成史研究会

例言

1. 本報告は令和3(2021)年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)(令和3年~令和5年)課題番号21KK01002「人文資料形成史における博物館学的研究 - 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 -」(研究代表 内川隆志)(研究代表:内川隆志)の令和3(2021)年度研究成果報告書である。
2. 研究対象としている根岸家の現当主である根岸友憲氏には、全面的なご協力を賜った。
3. 今回掲載した「イェナ大学東洋貨幣陳列室所蔵 H.v. シーボルト寄贈銭貨コレクションの研究」は、平成29年度科学研究費基盤研究(B)(平成29年~令和元年)課題番号17H02025「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」の成果であるが、根岸武香も熱中した古銭蒐集のネットワークを含む内容であることから本研究報告に掲載することとした。イェナ大学東洋貨幣陳列室の調査に関しては、イェナ大学文書(Universitätsarchiv Jena)館長ヨアヒム・バウアー教授(apl. Prof. Dr. phil. habil. Joachim Bauer)、イェナ大学東洋学、インド・ゲルマン語学、先史・原始考古学研究所(Institut für Orientalistik, Indogermanistik, Ur- und Frühgeschichtliche Archäologie)所属ヨーゼフ・ペーター・イエシュケ(Dr. des. Josef Peter Jeschke)氏から多大なるご支援を頂戴した事を記して謝する次第である。
4. 研究組織(近代博物館形成史研究会)は、以下のとおりである。

研究代表者 内川 隆志(國學院大學文学部教授)

研究分担者 三浦 泰之(北海道博物館学芸主幹)

研究協力者(五十音潤順)

新井 端 (熊谷市立江南文化財センター)

五十嵐 睦美 (北海道立帯広美術館副館長)

池田 榮史 (國學院大學研究開発推進機構教授)

Ilona Bausch (ライデン大学日本研究科講師)

堅田 智子 (関西学院大学教育学部助教)

鎌形 慎太郎 (國學院大學大学院博士課程前期修了)

徳田 誠志 (関西大学客員教授)

鳥越 多工摩 (國學院大學研究開発推進機構客員研究員)

成澤 麻子 (元公益財団法人静嘉堂文庫司書)

長谷 洋一 (関西大学文学部教授)

深澤 太郎 (國學院大學研究開発推進機構准教授)

古畑 侑亮 (一橋大学大学院非常勤講師)

森田 安彦 (熊谷市文化センター所長)

山本 命 (松浦武四郎記念館館長)

米崎 清美 (武蔵野ふるさと歴史館学芸員)
5. 本書の編集は、内川隆志・鳥越多工摩が行った。
6. 本書を編集するにあたり下記の諸氏(五十音順)、機関よりご協力を賜った。心より御礼申し上げる次第である。

高橋桃子(茅ヶ崎市教育委員会)・富山悠加(國學院大學大学院博士課程前期修了)・楠恵美子(大田区教育委員会)・植田 真(株式会社パスコ)・篠田浩輔(國學院大學大学院博士課程前期)・樋口典昭(奈良国立文化財研究所都城発掘調査部考古第二研究室 アソシエイトフェロー)

目次

例言	i
イエナ大学東洋貨幣陳列室所蔵 H.v. シーボルト寄贈錢貨コレクション調査報告	1
はじめに	1
1. ハインリッヒ・フォン・シーボルトをめぐる人びと	2
はじめに	2
(1) 日本への道	3
(2) 好古家として	4
おわりに	5
2. 熱狂する古銭蒐集の萌芽とその展開	8
(1) 古銭蒐集の発端	8
(2) 江戸中後期古銭書にみる古銭蒐集の展開	8
(3) 古銭家番付にみる寛政期と明治初期の古銭界	11
(4) おわりに	12
3. イエナ大学東洋錢貨陳列室所蔵のシーボルト錢貨コレクションの分析 —基礎作業としての冊子の再整理とその問題—	15
(1) シーボルト錢貨コレクションの概要	15
(2) 冊子に収録された錢貨とその問題	22
おわりに	25
『榎園好古図譜』第一冊について	39
はじめに	39
1. 『榎園好古図譜』について	39
2. 『榎園好古図譜』第一冊の内容	39
おわりに	41
船木遺跡出土「田村墨書須恵器」について	71
はじめに	71
1. 「田村墨書須恵器」について	71
2. 出土地点に関して	73
3. 「田村墨書須恵器」の語るもの	76
結語	77

イエナ大学東洋貨幣陳列室所蔵 H.v. シーボルト寄贈銭貨コレクション調査報告

内川隆志・深澤太郎・堅田智子・鳥越多工摩・鎌形慎太郎

はじめに

本報告はドイツのイエナ大学東洋銭貨陳列室（Orientalisches Münzkabinett Jena）に所蔵されているアジア・イスラム銭貨のうち、ハインリッヒ・フォン・シーボルト（小シーボルト）が日本で収集した銭貨に関する報告である。イエナ大学のホームページによれば、1840年に基礎が築かれたこの陳列室はドイツ2位の規模を誇るという。この陳列室には、ハインリッヒ・フォン・シーボルトが蒐集した日本銭貨・中国銭貨が約1060枚収蔵されているともある（http://www.unijena.de/Orientalisches_Muenzkabinett.html）。

1869（明治2）年に来日したH.シーボルトは、日本の文人と幅広く交友して日本の博物学・考古学の成立に大きな影響を与えたことはよく知られている。親交を持った人々の中には後世に好古家と総称されるコレクターも大勢おり、彼らとの交友を通じて日本のさまざまな考古資料や民具などを収集してきた。それらの収集資料はヨーロッパ各所に分散しており、本章で扱うシーボルト銭貨コレクションもそのような資料群のひとつである。

2019（令和元）年11月、「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（2017（平成29）～令和元年度科学研究費補助金基礎研究B（17H02025）、研究代表内川隆志）の一環として内川隆志、深澤太郎、堅田智子の3名でイエナ大学を訪問し、シーボルトが収集したという日本銭・中国銭1090枚（以下、実物資料と呼称）を調査した。その全てが銭貨ではなく、絵銭・護符類が相当数含まれていることや、日本銭・中国銭と一括したが、その中には琉球銭、安南（ベトナム）銭、朝鮮銭などが含まれていることも確認した。

陳列室には、シーボルトが収集したとされる銭貨の拓本？（以下、収録資料と呼称する。詳細は23P参照）を取めた冊子2冊も取められている。同大学のスタッフによれば、確実なシーボルト銭貨コレクションはこの冊子に収録された銭貨であるという。実物資料の中には、シーボルト以外の人物が収集したものも含まれているとのことであった。そこで、シーボルトが作成したとされる冊子の収録資料を軸に調査を進めた。

ところで、資料の種類によって点数が異なるという問題がある。同大学ホームページと今回実見できた実物資料の枚数とはズレがみられるものの30枚程度と少なく、誤差とみなせる範囲にある。ところが、冊子収録資料は990点と同大学ホームページや実見できた点数より70～100点ほど少なく、誤差とみなすにはやや多い。かつてイエナ大学では収録資料と実物資料との照合作業をおこなったが、上記の理由もあってか不完全なまま終わっている。

そこでシーボルト銭貨コレクションの全容を把握するための基礎調査として、シーボルト銭貨コレクションの確実な資料とされる冊子の内容を改めて整理し、実物資料との照合に向けた基礎調査報告とする。貨幣資料の分析は鳥越多工摩を中心に実施した。

第1節・第2節ではハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908）の好古家として日本ならびにヨーロッパとのネットワークをめぐる状況、シーボルトら好古家たちが熱中した古銭蒐集に関して中近世からの古銭蒐集の萌芽と展開についてその概要を俯瞰した後、第3節ではイエナ大学東洋銭貨陳列室に収蔵されているシーボルト銭貨コレクションの現場と調査によって得られた成果と課題等を明らかにしたい。

（内川隆志）

1. ハインリッヒ・フォン・シーボルトをめぐる人びと

はじめに

1908年8月11日、南チロルのメラーンにあった居城フロイデンシュタイン城において、ハインリッヒ・フォン・シーボルト (Heinrich von Siebold, 1852-1908) が死去した (図1)。翌日にはすぐさまオーストリア＝ハンガリー帝国内で発行されていた諸新聞に訃報が掲載されたが、ハインリッヒの功績をもっとも詳細に報じたのは、『ノイエ・フライエ・プレッセ』 (*Neue Freie Presse*) であった。「ハインリッヒ・フォン・シーボルトは、1866年にミュンヘンで死去した日本学者フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの息子であり、1852年7月21日に生まれた」との説明から始まり、続いて1872年2月に駐日オーストリア＝ハンガリー帝国公使館臨時通訳生として採用されてから1889年4月に男爵位を授与されるまでの経歴が紹介されている⁽¹⁾。

一方、日本では1909年9月19日、『朝日新聞』に「シーボルト男爵逝く」と題し、ハインリッヒの死が次のように報じられた。

日本に關する多くの探査を爲して名ある植物學者の息たるハインリヒ、フォン、シーボルト男は去月十二日メランにて逝去せり、同男は極東に在る事廿有五年にして特に日本に關する智識は歐洲一と稱せられたる紳士にして、始めて奥國皇太子選王侯フェルジナンド、フォン、ジーボルト殿下 (ママ) を案内して世界旅行を試み一八九四年横濱駐在總領事となり、後清國駐在を命ぜられ其後再び東京駐在公使代理として令名ありき⁽²⁾

両国の報道で共通するのは、一外交官としてのハインリッヒの功業よりも、父フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) の存在がことさら強調されていることである⁽³⁾。こうした報道の傾向は、「大シーボルト」フィリップ・フランツに対して、ハインリッヒを「もう一人のシーボルト」あるいは「小シーボルト」とするこれまでのシーボルト家研究の風潮の先駆けともいえる。ハインリッヒは日本滞在中に、数々の遺跡や貝塚の発掘調査にあたり、とくに大森貝塚の解釈をめぐり、エドワード・モースと人種・民族論争を展開した。また、『日本考古学』 (*Notes on Japanese Archeology with Especial Reference to the Stone Age*) や『考古説略』を出版し、日本考古学と民族学の黎明期を築いた。しかしながら、そもそもハインリッヒがいかなる人物であったのか、基礎的な研究が十分になされないまま、シーボルト家研究の一部としてハインリッヒが取り上げられ、「小シーボルト」としての評価を脱せずにいる。

本稿では、まず日本との出会いに焦点をあて、ハインリッヒの来日までの経緯を概観する。そして、江戸時代の物産会を起源とする古物会やヨーロッパへの日本関係コレクションの寄贈・売却に着目しながら、日本とヨーロッパに広がる好古家ネットワークとハインリッヒの関係を見ていく。



図1 ハインリッヒ・フォン・シーボルト (1897年撮影／ブランデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴ所蔵)

こうした試みは、ハインリッヒの好古家としての一面を明らかにするのはもちろんのこと、脱「小シーボルト」論の一助となり得ることだろう。

(1) 日本への道

ハインリッヒ・フォン・シーボルトは、1852年7月21日、ドイツのライン河畔の街ボツパルトで、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男として誕生した⁽⁴⁾。ヨーロッパではハインリッヒを「彼ほど日本語をマスターしたヨーロッパ人はいなかった」「日本と欧州的観念の天稟の斡旋者」「口語をすばらしくよく知っているにもかかわらず、漢字を勉強する努力を一度もしたことがない」というように、日本語力や日本理解を高く評価する傾向にあるが、これは兄アレクサンダー・フォン・シーボルト (Alexander von Siebold, 1846-1911) への評価と酷似する⁽⁵⁾。

ハインリッヒの名が初めて日本側の史料に登場するのは、1862年7月のことである。外国奉行竹内保徳を正使とし、安政の五カ国条約で規定された江戸と大坂の開市、兵庫と新潟の開港の延期交渉を目的に幕府より派遣された文久遣欧使節団は、ベルリンに向かう翌朝の汽車を待つべく、ケルンに一泊していた。使節のドイツ滞在を知ったシーボルト兄弟の母ヘレーネ・フォン・ガーゲルン (Helene von Gagern, 1820-1877) は7月16日夜、ハインリッヒら子供たちを連れ、日本に滞在する夫と長男の消息を知りたいと、使節が宿泊するホテルを訪ねたのである。ヘレーネらに対応をしたのは、使節の翻訳方であった福澤諭吉だった。福澤の「西航手帳」には、福澤による「コールンにてシーホルトの妻及其二女一子に遇ふ」の記述の横に、「Hendrik von Siebold 10」と、当時、10歳だったハインリッヒの直筆の署名が残されている⁽⁶⁾ (図2)。このケルンでの面会を機に福澤はシーボルト兄弟と交流をもつようになった。1870 (明治3) 年2月、異母姉である楠本いね (1827-1903) が東京・築地に産院を開業し、シーボルト兄弟がここに同居すると、福澤はしばしば彼らのもとを訪れた。

アレクサンダーの来日は、父がみずからの「生き証人」となることを望んだためである。一方でハインリッヒの来日は自身による自発的なものであったが、やはり父の存在は大きかった。外務省外交史料館所蔵の簿冊『各国祝祭典記念会関係雑件 独人「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト」渡来百年記念ヲ長崎ニ於テ開催ノ件』収録の「故ジーボルト男一族略伝」にハインリッヒの項があるが、ハインリッヒが東洋文化や歴史に興味をいだききっかけが、「父フィリップ、フランツ、フォン、ジーボルトが第一、第二次日本旅行ヨリ持帰りタル貴重ナル蒐集品」であったという⁽⁷⁾。ハインリッヒは兄と同じくギムナジウムを卒業することなく、兄の秘書本間清雄から日本語を学び、1869年に来日した。1872年2月には、駐日オーストリア＝ハンガリー帝国公使館臨時通訳生に現地採用され、兄を追うように外交官とし

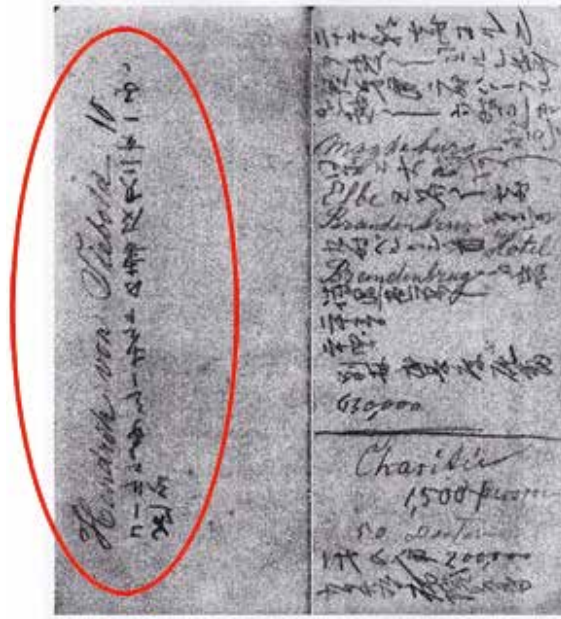


図2 「西航手帳」にあるハインリッヒ・フォン・シーボルトの署名 (福澤諭吉「西航手帳」1862年、90葉〔福澤諭吉協会による1984年復刻版を転載〕)

(Hans Körner, *Die Würzburger Siebold: eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts*. Neustadt an der Aisch: Verlag Degener & Co. Inhaber Gerhard Geßner 1967)

ての道を歩み始めたのである。

(2) 好古家として

ハインリッヒの好古家としての一面を語るうえで、1875（明治8）年12月に元松平主殿頭邸にてハインリッヒが主催し、「古今物品」を持ち寄り、意見を交換することを目的とした古物会を避けてはとおれない⁽⁸⁾。古物会の「廣告」には、会主「ヘンリー ホン シーボルト」のほか、「補助」として蜷川式胤、松浦武四郎、柏木貨一郎、栗本鋤雲らの名がある。管見の限り、1876年4月、1879年5月にもハインリッヒが主催あるいは参加する古物会（「古物陳列会」）が開催されており、ハインリッヒが好古家ネットワークの中心にいたことが分かる⁽⁹⁾。愛銭家として、柏木や松浦らとともに、「奥地利 シーボルト」として、1878年、1880年、1883年の「愛古銭」番付に名を連ねている⁽¹⁰⁾。

いつ頃、どのようにハインリッヒが好古家たちと知り合ったのか、またどのような交流をもっていたかを解明するには、さらなる調査を要するが、おそらくもっとも早くハインリッヒと出会ったのは栗本だと思われる。栗本は徳川昭武遣欧使節の一員としてパリ万国博覧会（1867年）に参加したが、当時、英国公使館員であったアレクサンダーも随行しており、アレクサンダーがハインリッヒに栗本を紹介した可能性もあろう。1872年9月、ハインリッヒは栗本が主筆を務めた『郵便報知新聞』に「博物館論」を寄稿しているが、栗本による紹介文には「兄」についてもふれられており、三者の関係は深かったのだろう⁽¹¹⁾。

現在、ウィーン応用美術博物館（MAK）、ウィーン世界博物館には、シーボルト兄弟により寄贈・売却された日本関係コレクションが数多く収蔵されている。とりわけ注目すべきは、ウィーン世界博物館所蔵の日本関係コレクションのうち、約5割がハインリッヒに由来するものだとされていることである⁽¹²⁾。1888年から1889年にかけて、ハインリッヒは5200点にもおよぶ日本関係コレクションをオーストリア帝立＝王立自然史博物館（現ウィーン自然史博物館）に寄贈した。フィリップ・フランツもオーストリア帝立図書館、オーストリア帝立貨幣骨董陳列室に日本関係コレクションを寄贈・売却しており、シーボルト兄弟も少なからず父の影響をうけていたと思われる。シーボルト兄弟とウィーンの博物館、そして日本関係コレクションの寄贈・売却をめぐるのは、シーボルト兄弟がウィーン万国博覧会（1873年）において、日本側の博覧会事務局のメンバーであったことに加え、MAKの前身であるオーストリア帝立＝王立芸術産業博物館の特派員を務めていたことが大きい。

機関誌『オーストリア帝立＝王立芸術産業博物館報告』（*Mitteilungen des K. K. Österreichischen Museums für Kunst und Industrie*）によれば、アレクサンダーは1869年11月、ハインリッヒはウィーン万国博覧会後の1873年11月頃にオーストリア帝立＝王立芸術産業博物館の特派員となった⁽¹³⁾。なお、アレクサンダーが特派員に任命されたのは、日本人との交友関係や日本語、日本文化への造詣の深さであり、美術品を見極める能力を買われたわけではなかった。ハインリッヒの任命理由は、『オーストリア帝立＝王立芸術産業博物館報告』で明かされることはなかったが、おそらくアレクサンダーと同様だったと思われる。

シーボルト兄弟はヨーロッパ各地の博物館やヘッセン、バーデン、ザクセン＝ヴァイマルの大公らに日本関係コレクションを寄贈・売却していた。とりわけドイツ皇后の弟にあたるザクセン＝ヴァイマル大公カール・アレクサンダー（Großherzog Carl Alexander August Johann von Sachsen-Weimar-Eisenach, 1818-1901）は、条約改正交渉にむけたオットー・フォン・ビスマルクの懐柔政策（1880年）や伊藤博文憲法修業（1882年）を通じて、アレクサンダーと親密な関係にあった。こうした大公との関係は、もともとは父フィリップ・フランツにより築かれたものであり、大公の日本や日本文化への関心を高め、日本関係コレクションの寄贈につながったと考えられる⁽¹⁴⁾。

ハインリッヒは好古家たちと交流を重ねることで、徐々に審美眼を備えていったのだろう。1890年2

月には、日本美術協会の名誉会員に選出されている⁽¹⁵⁾。また 1895 年には、本草学者山本章夫が定期的
に開催した京都博覧会（聚芳社から改称）の賛成員として、久邇宮朝彦親王、岩倉具定、大隈重信、田中
芳男、栗本鋤雲らと名を連ねた⁽¹⁶⁾。ハインリッヒは同会唯一の外国人会員というだけでなく、名簿では
華族とともに上位に位置付けられていたことは、非常に興味深い。1896 年 5 月 1 日付『讀賣新聞』朝刊
には、「京都に於ける澳國公使館書記官」として、ハインリッヒが京都の「鑑識家諸氏」と懇談し、「鑑識
家諸氏」は「珍藏の書畫器物を持寄りて展覽」したとある⁽¹⁷⁾。ハインリッヒの好古家ネットワークは、
公使館員として赴任していた東京のみならず、京都まで広がりを見せていたようである。

ハインリッヒと同時期に駐日オーストリア＝ハンガリー帝国公使館に書記官として勤務していたハイ
ンリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギー(Heinrich Graf von Coudenhove-Kalergi, 1859-1906)は、ハインリッ
ヒが日本での外交官として代理職止まりであった要因に、大々的に骨董商(Curiohandel)を営んでいる
ことと私生児で混血の助産婦の姉、すなわち楠本いねの存在があり、これらを再三にわたり指摘されてい
たとした⁽¹⁸⁾。ハインリッヒはオーストリア帝立＝王立芸術産業博物館特派員であったにもかかわらず、
オーストリア＝ハンガリー帝国外務省は相反する評価を下し、好古家ハインリッヒを「風変わり」(curious)
な人物と見なしていたのである。

おわりに

本稿では、好古家ネットワークに着目し、日本とヨーロッパに広がるハインリッヒ・フォン・シーボルト
の交友関係の一端を見た。シーボルト父子が寄贈・売却した日本関係コレクションは、ドイツ、オース
トリア、オランダ、英国などの博物館等に所蔵されているが、その広がりにはシーボルト父子の活動や交友
関係にもとづくものであった。また、日本とヨーロッパに広がる交友関係は、父フィリップ・フランツか
ら息子たちへとたしかに受け継がれていった。長男アレクサンダーは、外交官として明治政府に約 40 年
にもわたり奉職し、青木周蔵、伊藤博文らとともに、日本の近代化を牽引した。次男ハインリッヒもまた、
オーストリア＝ハンガリー帝国の外交官として活躍したが、父の学者としての素養を受け継ぎ、考古学者、
日本学者として、考古学や日本美術に傾倒したのである。

現在、国立歴史民俗博物館を中心に、共創先導プロジェクト（共創促進研究）日本関連在外資料調査研
究「外交と日本コレクション—19 世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン
空間における活用」（2022 年度～2027 年度）の一部として、シーボルト父子関係資料の調査が進められ、
筆者もこれに参加している。今後、さらなる資料調査が進み、ヨーロッパにおけるシーボルト兄弟の活動
や交友関係が解明されることが期待される。また同時に、江戸時代から続く蘭学、洋学の学問的系譜、好
古家ネットワークを基軸として、日本国内におけるシーボルト兄弟の活動を考究すべきであろう。

註

- (1) "Heinrich Freiherr v. Siebold" in: *Neue Freie Presse*, Nr. 15796, Wien, 12.8.1908, S.9.
- (2) 1908 年 9 月 19 日付「シーボルト男爵逝く」『朝日新聞』朝刊（東京版）、第 3 面。
- (3) 『ノイエ・フライエ・プレッセ』での訃報記事では、ハインリッヒの経歴よりもオーストリア帝立＝
王立園芸協会により設置されたヨーロッパ初のフィリップ・フランツの記念碑について文字数が割
かれた。

ウィーン万国博覧会（1873 年）では、園芸家や植物学者よりフィリップ・フランツの記念碑の設
置が提案され、1881 年にウィーン市内パークリンクにあったオーストリア帝立＝王立園芸協会の
建物脇に設置された。現在、記念碑はシェーンブルン宮殿敷地内にあるが、これは 1926 年に日本
総領事館が寄付を募り、修復して移設したものである。ウィーンのフィリップ・フランツの記念碑

について、以下参照のこと。"Ueber des F. v. Siebold zu errichtende Monument" in: K. K. Gartenbau-Gesellschaft in Wien (Hg.), *Der Gartenfreund: Mittheilungen aus allen Fächern des Gartenbaues*, VII. Jahrg. Nr. 7, Wien, 1874, S.1f.; "Denkmal für Ph. Freiherrn von Siebold" in: Ebd., VII. Jahrg. Nr. 12, 1874, S. 1f.; "Zur Erinnerungen an Philipp Franz von Siebold" in: *Illustriertes Wiener Extrablatt*, Nr. 110 vom 22.4.1881, Wien, S.1. 石山禎一「ウィーンにあるシーボルトの記念碑」『科学医学資料研究』第29巻第1号、野間科学医学研究資料館、2000年、11-14頁。沓澤宣賢「国内外にあるシーボルト記念碑とシーボルト像について」『東海史学』第41号、東海大学史学会、2007年、1-4頁。

- (4) ハインリッヒ・フォン・シーボルトについて、以下参照のこと。Hans Körner, *Die Würzburger Siebold: eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts*, Neustadt an der Aisch: Verlag Degener & Co., Inhaber Gerhard Geßner, 1967, S. 530-548. ヨーゼフ・クライナー「ハインリヒ・フォン・シーボルト——その人と業績にまつわる資料の紹介——」『鳴滝紀要』第1号、シーボルト記念館、1991年、202-236頁。同「三人のシーボルト」ヨーゼフ・クライナー編著『黄昏のトクガワ・ジャパン——シーボルト父子の見た日本』日本放送出版協会、1998年、38-41頁。沓澤宣賢「ハインリッヒ・フォン・シーボルトに関する一考察——日本に残された外交関係史料を中心に——」佐藤元英、武山眞行、服部龍二編著『日本外交のアーカイブズ学的研究』中央大学出版部、2013年、1-22頁。鈴木廣之編『好古家たちの19世紀——幕末明治における《物》のアルケオロジー——』吉川弘文館、2003年。ヨーゼフ・クライナー編『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2011年。
- (5) ヨーゼフ・クライナー「もう1人のシーボルト——日本考古学・民族文化起源論の学史から——」同『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』4頁。
- (6) 「西航手帳」とは、福澤がパリで購入した手帳に、旅行中の見聞を記したものである。シーボルト母子との面会について、福澤のヨーロッパ巡歴中の日記「西航記」に記述はない（「西航日記」福澤諭吉『福澤諭吉全集』第19巻、岩波書店、1962年、38頁）。
- (7) 「故ジーボルト男一族略伝」所収「第四章 ハインリッヒ、フキリップ、フライヘル、フォン、ジーボルト」（外務省外交史料館所蔵『各国祝祭典記念会関係雑記 独逸人蘭医「フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト」渡来百年記念祭ヲ長崎ニ於テ開催ノ件」〔6門4類6項4-4〕）翻刻は、沓澤宣賢の論文「ハインリッヒ・フォン・シーボルトに関する一考察」（4-6頁）にある。
- (8) 古物会について、徳田誠志「H. V. シーボルトと関西大学博物館所蔵資料」『関西大学博物館紀要』第9号、関西大学博物館、2003年、57-77頁。
- (9) 1876年4月16日付『讀賣新聞』第1面。1876年5月1日付『郵便報知新聞』第3面。平野恵「好古から考古へ——近世から近代へ継承された学問の形態——」（http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/ouroboros/09_03/bunkyo.html）（2022年12月18日閲覧）

好古家ネットワークの形成について、國學院大學教授内川隆志を研究代表とする科研費基盤研究（B）「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（2017年度～2019年度／課題番号：17H02025）（<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-17H02025/>〔2022年12月18日閲覧〕）にて調査が進められた。

また、ハインリッヒと蝮川およびウィーン世界博物館所蔵日本関係コレクションの形成について、日高薫「シーボルト兄弟による日本コレクションの形成と拡散——蝮川式胤との関係を中心に——」日高薫、ベッティナー・ツオルン責任編集、国立歴史民俗博物館編『異文化を伝えた人々Ⅱ——ハインリッヒ・フォン・シーボルトの蒐集資料——』臨川書店、2021年、41-56頁。脇田美央「ハインリッヒ・フォン・シーボルト寄贈の茶入が語るもの——シーボルト、蝮川式胤と1870年代半ばのウィーンにおける日本の茶陶——」同、23-39頁。

- (10) 『愛泉家一覧』 鬼頭久吉、1880年。
 ハインリッヒが愛銭家として蒐集した古銭は、ザクセン＝ヴァイマル大公カール・アレクサンダーに寄贈され、現在はイエナ大学東洋銭貨陳列室 (Orientalisches Münzkabinett Jena) に収蔵されている。2019年11月に、科研費基盤研究 (B) 「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」の一環として、國學院大學教授内川隆志、同大学准教授深澤太郎、流通科学大学講師 (当時) 堅田智子の3名が、ハインリッヒ由来とされる古銭の現地調査を実施した。
- (11) 「博物館論」1872年9月29日付『郵便報知新聞』第3-4面。
- (12) シーボルト兄弟とウィーンの諸博物館への日本関係コレクションの寄贈について、拙稿「シーボルト兄弟にとってのウィーン——日独澳関係史、広報文化外交史の交点として——」前掲『異文化を伝えた人々Ⅱ』9-21頁。
- (13) "Von der Ostasiatischen Expedition" in: Bruno Bucher (Hg.), *Mittheilungen des K. K. Österreichischen Museums für Kunst und Industrie: Monatsschrift für Kunst und Kunstgewerbe*, Jg. V, Nr. 52, Wien: Selbstverlag des K. K. Österr. Museums, 1870, S.81; „Kleiner Mittheilungen Correspondenten des Museums“ in: Ebd., Jg. VIII, Nr. 98, 1873, S.504.
- (14) *Weimar-Jena-Tokyo: Beziehungen um 1900*. Jena: Friedrich-Schiller-Universität Jena 2017; Gerda Wendermann, *Tokyo-Weimar: Kunst und Kultur, Chrysantheme und Falke: Carl Alexander und Japan- Weimar Jena Tokyo*. Jena: Friedrich-Schiller-Universität Jena, Klassik Stiftung Weimar, Landesarchiv Thüringen 2018.
 ザクセン＝ヴァイマル大公カール・アレクサンダーと日独関係については、福岡大学教授星乃治彦を研究代表とする基盤研究 (C) 「ドイツ第二帝政及び日独外交史の新視点——カール・アレクサンダーを中心に——」(2017年度～2019年度/課題番号: 17 K 03200) にて調査が進められた (<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-17K03200/> [2022年12月18日閲覧])。その成果は、*Ostasien im Blick-die Universität Jena und das Grossherzogtum Sachsen-Weimar-Eisenach 1873-1945* として、イエナ大学史叢書より刊行予定である (2019年度「科学研究費助成事業研究成果報告書」 [<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-17K03200/17K03200seika.pdf>] [2022年12月18日閲覧])。
- (15) 1890年2月21日付『讀賣新聞』朝刊、第2面。
 『日本美術協會報告』第27号には、1890年2月22日に開催された総会や2月の入退会者に関する記述があるが、ハインリッヒの名譽会員選出についてはいっさいふれられていない (『日本美術協會報告』第27号、日本美術協會、1890年)。
- (16) 山本読書室旧蔵 (京都府立京都学・歴彩館寄託) 「明治28年7月調『京都博覽會人名』」(仮目録番号4748.7) 真下正太郎編『溪愚山本章夫先生小伝』山本読書室、1922年、10頁。
- (17) 1896年5月1日付『讀賣新聞』朝刊、第3面。
- (18) Körner, a.a.O., S.541.

(堅田智子)

2. 熱狂する古銭蒐集の萌芽とその展開

(1) 古銭蒐集の発端

明治15年(1882)に日本で初めてメソジスト牧師の一人となった山中笑(1850～1928)は、山梨県甲府教会の牧師として伝道活動を行う傍ら、好古家としての顔も持ち、松浦武四郎や根岸武香等との交友を持っていた⁽¹⁾。古銭にも通曉していた山中は、

古銭を集る寛文以前のことは定かならねど、伝ふところによれば東山義政公京都六條河原にて種々の銭を鑄させ、小児に賜りしことありしを、元和寛永の頃には御所に於て花蝶定めといへることありしと、東福門院古銭を愛玩し、本阿弥光悦又愛玩したりと云ふ。

と蒐集の淵源に言及⁽²⁾、清野謙次も同じ見方をする⁽³⁾。だがこれは、瀬尾柳齋(丹波屋彦兵衛)によって元文3年(1738)まで書き継がれた『板兒録』に記された伝承で、確定的な史実ではない。小槌義雄は、足利義政の唐物崇拜との関連から、古銭蒐集も義政に帰する風潮が定着したと見る⁽⁴⁾。一方、その萌芽は江戸幕府による寛永通宝鑄造に伴う銭貨統制との関連⁽⁵⁾が深いと看做す。すなわち、江戸幕府は寛永銭以外の使用を禁じたとはいえ、流通を停止された中国銭をはじめとする古銭が大量にあり、それを廃棄するには惜しいと考える者が中国趣味を最も手軽に楽しめる絶好の遊びとして蒐集が始まり、発展したというのである。

蒐集が浸透していたと見られる元禄年間には、中国古銭書『泉志』の翻刻版⁽⁶⁾と、日本初の版本古銭書が大坂上人町の雁金屋庄兵衛⁽⁷⁾から刊行された。古物鑑識の手引書と目される『万宝全書』は元禄7年(1694)版以降、版を重ねたが⁽⁸⁾、古銭部が8巻「和漢古今宝銭図鑑」にあたる。同書は、『泉志』と構成と分類が共通しており、中国銭書に依拠している。銭形の内に銘文を記しただけの簡易な記載だが、以降も広く流布した版本であった。江戸期を通じて古銭書が刊行されるが、記述の中心は中国銭貨であった。

ここでは、古銭書の書誌情報や番付をもとに、江戸中期以降における古銭蒐集家の展開とその特徴を把握するとともに、明治前期にかけて一部の好古家にも継承された古銭蒐集の一端を示したい。

(2) 江戸中後期古銭書にみる古銭蒐集の展開

川見典久は、17世紀末～19世紀前半にかけての古銭書を著者・内容・意図といった観点から性格を体系的に整理した。ここでは、川見論文に依拠しつつ古銭書一覧(表1)を作成した。以下、それにより古銭書を俯瞰してみよう。

・内容的特色

川見によれば、古銭書の性格には、①蒐集家としての関心から、入手した実物の位置づけや各銭貨の稀少性への関心が強く反映されたもの、②歴史や貨幣制度を考証したものに大別できると見通す。

A) 実物の位置づけや稀少性が示された古銭書

元禄9年(1696)に越中富山藩主・前田正甫(1649～1706)が著した『化蝶類苑』(表1—No.2)がその嚆矢となる。書名にみえる「化蝶」とは銭の異称で、禁中に花開く夜、数万の蝶が花の間に集まるのを捕獲して夜明けに見ると、皆庫中の金玉であったという逸話(『杜陽雜編』)に因む。また、朽木昌綱の師、宇野宗明⁽⁹⁾は従来の古銭書の不備を指摘し、銭径・重量・字体の重要性に着目する。一方、稀少度合いの等級が付けられた早い例は、大坂島町商人・中谷顧山(通称：播磨屋重兵衛)の刊本(表1—No.3～6)が挙げられる。享保年間(1716～1736)頃には、初学者向けの平易な図入り銭書が意図され、中谷がそれを確立した。特に『和漢孔方図会』(孔方図鑑)(表1—No.5)は、稀少度を10段階に示した点が前田正甫の7等級よりも細密であり、ヒットが注記される点も特徴的である。小槌義雄は、中谷をもって「古銭書の様式を決めた」と評するが、以降、『孔方図鑑』の誤りを正した著書として、福知山藩主朽

表1 近世の代表的な古銭書一覧(川見典久 2019 「江戸時代における古銭書の全貌」『古文化研究』(黒川古文化研究所)18を基に作成)

番号	書名	著者	刊行年	刊行地	概要
1	和漢古今宝銭図鑑	著者不詳 / 雁金屋庄兵衛刊	元禄7年(1694)	大坂	中国・日本銭を図入で紹介 / 図は外輪・内郭のある銭形を描き、楷書で銭文を記した簡易な体裁
2	化蝶類苑	前田正甫(越中富山藩主)	元禄9年(1696)	写本	東洋銭貨をいろは順に並べ、発行時期・特徴を著述
3	古今百銭図	中谷顧山(大坂島町商人)	享保6年(1721)	大坂	日本・中国・朝鮮の貨幣から百点選んで銭文を列挙 / 稀少程度で公・卿・太・土・庶の順位を付記
4	珍貨百銭図	中谷顧山(大坂島町商人)	享保6年(1721)	大坂	中国・朝鮮銭を中心に、絵銭・厭勝銭類を多く含む / 稀少程度で公・卿・太・土・庶の順位を付記
5	和漢孔方図会	中谷顧山(大坂島町商人)	享保13年(1728)	大坂	中国・日本銭を古文銭・平銭・平銭不知品・大銭・日本銭・日本絵銭に分類 / 名称・鑄造時期稀少程度を10段階、ヒットを注記
6	珍貨孔方鑑	中谷顧山(大坂島町商人)	享保14年(1729)	大坂	古文銭・歴代平銭・年代不知品・大銭并刀布に分類 / 名称・鑄造時期と稀少程度を10段階で表記
7	国家金銀銭譜	青木昆陽(幕府書物御用)	延享3年(1746)	写本	日本近世の金銀銅貨を図示し、名称・重量・極印・錠目・鑄造時期を著述
8	国家金銀銭譜続集	青木昆陽(幕府書物御用)	宝暦8年(1758)	写本	前著の補書で、日本近世の金銀銅貨の他、大坂で近年出土した古代の無名銀銭も掲載
9	続化蝶類苑	宇野宗明(大坂上町問屋商人)	安永2年(1773)	写本	日本・中国銭を中心に、図は示さず性格を著述 / 従来古銭書の不備を指摘し、銭径・重量・字体を解説
10	新撰銭譜	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	天明元年(1781)	大坂・江戸	中国銭を正用品・偽品に分け、さらに契丹・高麗・安南・日本の銭貨を文献にも依拠しつつ収録 / 裏表掲載
11	西洋銭譜	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	天明7年(1787)	大坂・京都・江戸	ドイツ・オランダ等の西洋銭を図入で紹介 / 径・重量・刻印・図柄・各国の解説を付記
12	増補改正孔方図鑑	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	天明年間	大坂・江戸	中谷顧山の『和漢孔方図会』の改訂書
13	増補改正珍貨孔方図鑑	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	天明年間	大坂・江戸	中谷顧山の『珍貨孔方鑑』の改訂書
14	奇鈔百円	河村羽積(大坂地歌作詞家)	寛政元年(1789)	大坂・江戸	古銭蒐集を始めた人が集めやすい百銭を選び、歴代平銭・背文・手替銭・日本銭・絵銭・厭勝品に分類 / 拓図を掲載し、鑄造時期と稀少の度合いを15ランク付け / オランダをはじめとする西洋銭も収載
15	和漢古今泉貨鑑	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	寛政元年(1789)	大坂・江戸	これまでの古銭書の漢文体を読み易く仮名やルビを交えて著述 / 古文銭項を冒頭で追加し、国順であったのを正用品・偽品の中で国順に再編成し、さらに不知品・厭勝品・背文銭・近代和銭を追加 / 『新撰銭譜』の集大成で中国の古銭書『泉志』(洪尊)の延長上のもの
16	彩雲堂蔵銭目録	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	寛政2年(1790)	大坂・江戸	朽木自身が蒐集した銭貨を列記
17	和漢銭彙上編	芳川維堅(伝:大坂古銭商)	寛政5年(1793)	大坂・江戸	これまでの古銭研究を整理し、歴代日本銭・金銀銭・絵銭・水戸銭・加治木銭・加島銭・永利手に分類
18	弄銭奇鑑	朽木昌綱(丹波福知山藩主)	寛政8年(1796)	不明	入手し易い銭貨を選び、珍品は後編に収録 / 宋銭を篆書が対の有無で分類 / 雑銭に注目した画期的な書
19	弄銭奇鑑後編	久野克寛(数寄屋坊主組頭)	寛政8年(1796)	大坂・江戸	真書・篆書が対になる淳化~建炎の宋朝銭と、対にならない淳化~淳熙の不对品を著述 / 拓本から版を起したとみられる銭図に銭文・銭体の特徴を著述 / ★久野古寛・大村成富が朽木の命を受け編集
20	弄銭奇鑑続編	大村成富(江戸深川古銭商)	寛政11年(1799)	大坂・江戸	前記二書に新たな符合銭を加えた増補改訂版

番号	書名	著者	刊行年	刊行地	概要
21	皇朝錢図	小山政敷(江戸茶商兼金貸)	寛政11年(1799)	大坂・江戸	所蔵する皇朝錢の拓本を掲載し、稀少度合いを注記
22	錢譜	藤貞幹(還俗後京都考証学者)	不明	写本	皇朝錢・建武の乾坤錢を文献に依拠し論述し、伝世錢は拓影を収録
23	錢幣考遺	久野克寛(数寄屋坊主組頭)	文化4年(1807)	写本	日本・中国・高麗・安南・琉球の錢貨を拓図を添えて収録/解説は藤貞幹・小山政敷・市河寛齋説を引用
24	錢幣考遺図象	久野克寛(数寄屋坊主組頭)	成立年不明	写本	『錢幣考遺』を図版中心に再編成したもの
25	金銀図録	近藤守重(松前蝦夷御用取扱)	文化7年(1810)	写本	青木昆陽『金銀錢譜』を補正し、再度実物から477品の拓本をとり、68品は旗本・石川大浪の協力を得て彩色図を掲載
26	対泉譜	村田元成(娼家大文字楼主)	文化11年(1814)	大坂・江戸	符合錢図譜/宋代淳化~淳熙の233対を掲載/朽木昌綱『弄錢奇鑑』を受け、大村成富と共に刊行
27	新校正孔方図鑑	狩谷掖斎(考証学者)	文化12年(1815)	大坂・京都・江戸	古文錢・平錢・潜偽品・外国品・不知品・折二錢・大錢・日本錢・絵錢・厭勝品を拓図・鑄造期・稀少度を注記
28	三貨図彙	草間直方(大坂両替商)	文化12年(1815)	写本	従来の古錢書とは一線を画し、国内鑄造錢でも国史や御触書にないものは私鑄とした/計44冊の名著
29	珍錢奇品図録	大村成富(江戸深川古錢商)	文化14年(1817)	写本	従来の古錢書に倣い、拓図・名称・稀少度を注記
30	文晶堂錢譜	青山延于(水戸藩儒)	文政10年(1827)	写本	日本・中国・朝鮮・安南等の古錢を考証し、拓図紙片を貼付
31	符合泉志	山田孔章(尾張油商)	文政10年(1827)	尾張	宋代符合錢(対錢)の図録/錢貨の拓図・特徴・稀少度を注記
32	中外錢史	穂井田忠友(大坂生玉神社神主)	天保2年(1831)	不詳	当初、中国やアジア諸国を含めた貨幣史を企図したと見られるが、実際には日本錢のみ収載

木昌綱の家臣・小沢辰元の名で天明4年(1784)に刊行された『増補改正孔方図鑑』(表1—No.12)、及び翌年(1785)の『改正珎貨孔方図鑑』(表1—No.13)が挙げられる。文化12年(1815)には考証学者・狩谷掖斎(1775～1835)の意向を受けた、その子・懐之が3度目の改訂版(表1—No.27)を、幕末の安政6年(1859)には4度目の改訂版として中川積古齋が『安政孔方図鑑』として再補正した。明治初期に古錢界を牽引することとなる成島柳北の『明治錢譜』も孔方図鑑の系譜であった⁽¹⁰⁾。

愛錢家が拡がるにつれ、同じ銘文による違いが重視されるようになった。福知山8代藩主の朽木昌綱(1750～1802)は、霊岸島にあった中屋敷で生まれ、藩主として家督を相続するまで長く江戸で暮らし、13歳で弄錢の世界に入った⁽¹¹⁾。朽木は、洪尊の『泉志』を意識しつつも、図の不明瞭さを問題にし、実物から拓図を採って版下に用いた『新撰錢譜』(表1—No.10)を家臣・小沢辰元に命じて刊行して以降、相次いで古錢書を家臣とともに刊行した(表1—No.11～13・15・18)。寛政元年(1789)『和漢古今泉貨鑑』(表1—No.15)は江戸時代最大の古錢書とされるが、前著の完成と、『泉志』の延長線にあった。18世紀末の特徴としては、蒐集対象が拡大していることが読み取れる。朽木昌綱が7代藩主舖綱の死を受けて福知山藩主になった天明7年(1787)に刊行された『西洋錢譜』(表1—No.11)は、長崎オランダ商館長ティチングを介して、西洋貨幣や物差し等を入手していた縁から17～18世紀のヨーロッパ貨幣140点が収載された⁽¹²⁾。また、従来見過ごされてきた雑錢の中から、真篆対になるものが符合する宋錢があることが発見され⁽¹³⁾、朽木も拓本による対錢専門書(表1—No.18)を著した。なお、『弄錢奇鑑後編』(表1—No.19)は朽木が江戸幕府数寄屋坊主・久野克寛に託して刊行、『弄錢奇鑑 続編』は江戸古錢商・大村成富が刊行した。対錢書については江戸吉原の娼楼・村田元成(1754～1828)や尾張の油商・山田孔章(1768～1834)らも手がけた。

B) 歴史や貨幣制度を考証した古銭書

日本橋の魚問屋に生まれた青木昆陽は、伊藤東涯の古義堂で学び、享保7年(1722)に国学者加藤枝直(江戸町奉行与力)の推挙で大岡忠相に取り立てられた。元文5年(1740)、寺社奉行支配となり、3年に及ぶ歳月を諸国古文書調査に費やす。その前年には『錢幣略記』を著した⁽¹⁴⁾。延享3年(1746)成立の『国家金銀錢譜』(表1—No.7)は、日本の金銀銅貨に関して極印・鋳目の特徴や鑄造時期等を記しており、中国銅銭を主体とした従来の錢書とは異彩を放った。昆陽は、書物奉行という立場を生かして文献考証を加えていく態度が見られ、錢書にも反映された。その問題意識は、近藤正斎や草間直方らの貨幣考証に影響を与えた。4度の蝦夷地探索を行った近藤正斎(1771～1829)は書物奉行に栄転後に『金銀図録』全7冊(表1—No.25)を著した。鴻池家の別家である尼崎草間家の女婿となり、独立後は大坂で両替商を営んだ草間直方(1753～1831)の『三貨図彙』44冊を著した。この他、摂津国生玉神社神司の穂井田忠友はアジア諸国を含めた貨幣史を企図して『中外錢史』(表1—No.32)を、藤貞幹は、皇朝錢の『錢譜』(表1—No.22)や、『寛永錢譜』を著し、文献から貨幣考証を行った。

・刊行年代と刊行地の傾向

古銭書の刊行が盛んになるのは18世紀後半から19世紀初めにかけてである。朽木昌綱による天明元年(1781)刊『新撰錢譜』(表1—No.10)以前、錢書の刊行地は総て大坂であった。古銭書の著者は、宇野宗明・芳川維堅・河村羽積等、大坂に居住する者が多く、大坂が貨幣経済の中心地であった。「天下の台所」たる大坂は、膨大な物資が集積され、18世紀初頭には諸問屋5655人、仲買人8765人程いた記録もあり、商業都市として発展していた。一面では、圧倒的に原料と第一次加工品を入荷し、第二次加工品を全国に出荷するという産業都市の側面も強い⁽¹⁵⁾。北堀江町で酒造業を営んだ木村兼葭堂(坪井屋吉左衛門)もまた、「古銭ニ於ケルヤ風流好事ノ一端トシテ之ヲ愛玩」し、「其藏錢ノ多クハ朽木昌綱ノ手ニ入ル」(奥平昌洪1938『東亜錢志 第一』岩波書店)愛銭家の一人で、木村のもとには同士が集った。18世紀末(天明・寛政期)以降、刊行地に江戸が出現する(表参照)。寛政期には、全国古銭家番付も出版されるようになり、古銭書の刊行状況を鑑みても古銭熱は頂点に達した⁽¹⁶⁾。

(3) 古銭家番付にみる寛政期と明治初期の古銭界

古銭家番付は、古銭商によって発行された。寛政10年(1798)5月番付には全国445名の古銭家が掲載されているのに比して、大正4年(1915)9月番付には全国257名程であり、山中笑は「寛政年間が古銭流行の全盛時代にて大勢は江戸にありしなり」と結論付けた⁽¹⁷⁾。古銭家番付の中で最古とされているのは寛政4年(1792)正月番付である(図3)。番付には、勸進元・行司・世話人・頭取が中心に記



図3 寛政4年版 古銭家番付(小槌義雄論文より転載)

される。勸進元は発行者で、芳川維堅（甚右衛門）の名がある。芳川は宇野宗明に古銭を学んだ大坂の古銭商である。勸進元は、古銭界を牽引していたことを示す。16名でなる行司（書肆）は三都のうち、大坂が最多である。世話人は、商人が当てられることが多いが、この欄に朽木昌綱臣下の小澤東市（辰元）の名がある。差添は相談役の役割があり、頭取には格上の人があてられる。その一人、「京油小路 藤叔蔵」は藤貞幹を指す。既に蒐集の主流は江戸に移っているが、伊勢も多し点を小槌が注目する⁽¹⁸⁾。東の大関は坂井得三郎（姫路藩主酒井忠道）で、西の大関、桜田彩雲堂は朽木昌綱である。当時、『和漢孔方図鑑』掲載銭を完全蒐集したことが番付登載の基準とされた。

明治13年（1880）の愛泉家一覧を見ても（図4）、記載様式は寛政4年版と殆ど変わらない。ただ、東の欄外、神田五軒町「多気志楼」の名は注目される。これこそ松浦武四郎その人で、松浦は、慶応元年（1865）発行古銭番付では東前頭29枚目の位置にあり、『多気志楼蔵泉譜』・『外国貨幣誌』を著し、実家宛ての手紙等により古代銭・大判小判・縁起物の貨幣・西洋銭を集め、大蔵省・宮内省に所蔵銭を献納した点が明らかになっている⁽¹⁹⁾。

東の大関には成島柳北（1837～1884 松菊荘）がいた。奥儒者・成島稼堂の子として浅草御厩河岸に生まれた成島は、将軍家茂の侍講見習を経て、外国奉行・会計副総裁等を歴任、明治4年（1871）には浅草東本願寺学塾の学長に招聘された。これが転機となり、京都東本願寺翻訳局長を経験した後、『朝野新聞』局長に就任したが、言論弾圧の渦中に巻き込まれた点が知られる。古銭家としては、鷲田寶泉舎（東京古銭商）・中島泉貨堂（京都古銭商）・今井貞吉・中川近礼と並ぶ目きと評された。孔方図鑑の改訂版『明治新撰泉譜』を明治22年（1889）までに刊行した他、国内現存の古銭の集大成『本邦現存古泉目録』（明治14年）、ギリシャ・ローマの貨幣図録『群嶺一塊』等を著した⁽²⁰⁾。

西の大関には今井貞吉（1831～1903 風山軒）がいた。町方下横目を勤める土佐藩下級藩士の家で育った今井は、早くから博物理化の研究に没頭した。薬剤の法を究め、泉州堺で医師の経験も積んだ。土佐藩から懇請され、フランス人との交渉委員の一人として監察吏になったことが契機となり、明治元年（1868）には開成館の大坂表貨殖局作配役に抜擢される。その後は、度支局会計司、共立社執事、海南協同会惣代への選出や県会議員として地域の産業振興や政治に携わった。50歳を超えた頃には国内有数の古銭家と目された。『古泉大全』全38巻は蔵銭のうち901銭を掲載したもので、明治21年（1888）に完成させた。また、古希を迎えた今井は、同32年（1899）『重訂古泉大全』全5巻を追加刊行した⁽²¹⁾。

(4) おわりに

鎌形は以前、同番付の東前頭21枚目（囲線部）に位置した埼玉県大里郡冓山村・根岸武香の蒐集実態を明らかにした⁽²²⁾。その結果、武香所蔵の皇朝銭の約3割は、明治前期から交友があった柏木貨一郎（1841



図4 明治13年版 愛泉家番附（国会図書館デジタルライブラリー）

成島柳北・今井貞吉（大関）・柏木貨一郎・松浦（多気志楼）・根岸氏らの名が確認できる。

～1898：探古楼）が所持していた錢貨であった点が判明した。東前頭筆頭にあった柏木は、数寄屋建築の名手として活躍する以前、博覧会事務局・内務省・農商務時代の博物館に勤めた。美品の皇朝錢の蒐集でも知られ、皇朝錢から近世貨幣までの錢貨の由来を米価と対応させた『米価年表上下』を著す等、古錢界でも一家言を有していた。柏木は、江戸後期の考証家・古錢家である狩谷椽斎もしくはその子・懐之（同番付では年寄に位置）の旧蔵錢を譲り受けており、その幾つかが柏木から武香に渡った。武香はそれを記録化し、図譜として残そうとしていた。

この事例は、明治に入ってもなお、近世古錢家の旧蔵錢が整理され、資料として活用される道筋を摸索する動きと把握し得るだろう。18世紀前半に成立した孔方図鑑の誤りは幾度も改訂を繰り返しながら、再編輯されており、成島柳北の改訂もまた、そうした系譜が窺い知られるのである。

明治期の古錢蒐集と記録化の実際は、近世の先人たちが遺した蓄積を継承しながら発展した側面が強いと言えよう。一方では新時代の動向として、西南戦争の時局にある明治10年（1877）6月、成島柳北が発足させた東京月旦古錢会をはじめとする各地域の古錢会の表面化、そして成島没後は地域の閉鎖的な集まりから脱却した東京古泉会の設立といったように、愛錢家同士の横のつながりが強化されるようになっていく。

註

- (1) 内川隆志 2021「松浦武四郎明治十二年の旅—好古家とのネットワークをめぐって」『國學院雑誌』122—12。
- (2) 山中笑 1912「日本に於ける古錢研究の沿革」『考古学雑誌』7—12。
- (3) 清野謙次 1955『日本考古学・人類学史下巻』岩波書店（第五章 古錢嗜味—古錢研究書目）。
- (4) 小槌義雄 2000「江戸時代の古泉家と古泉書—対錢家（宋錢の専門収集家）の誕生」『アジア遊学』18。
- (5) 江戸幕府は寛永13年（1613）、江戸橋場・近江坂本にて寛永通宝の鑄造を通達し、錢貨の私鑄を禁じた。寛文8年（1668）に寛永通宝を輸出禁止とし、寛文10年（1670）に新錢と古錢の混用を禁止した。
- (6) 南宋・洪尊が著した『泉志』は明代に版行され、日本では元禄10年（1697）に京都の書林九兵衛が和刻刊行した。内容は、中国の歴代錢について、『史記』・『漢書』等を引用し、日本の錢貨も皇朝錢の長年までの7種が収録される（川見典久 2019「江戸時代における古錢書の全貌」『古文化研究』18）。
- (7) 雁金屋の最初の出版物は、『一目玉銚』・『本朝故事因縁集』（元禄2年）で、同6年（1693）以降、井原西鶴の『浮世栄花一代男』・『西鶴織留』・『好色兵揃』・『万の文反古』等、西鶴本を多く手掛けるようになった（速水香織 2020『近世前期江戸出版文化史』文学通信）。
- (8) 『万宝全書』には、元禄7年版12冊本・同9年増補再刷本・享保3年部分覆刻再刷本・宝暦5年部分削除再刷本・明和7年覆刻再版本の6種が数えられる（内村和至 1994『古今和漢万宝全書』初版本について』『桐朋学園大学研究紀要』20）。
- (9) 宇野宗明は、宝永元年（1704）大坂上町の木綿問屋・奈良屋久兵衛の3男として生まれ、13歳で古錢の世界に入った。隠居後には地図や古錢蒐集に没頭、明和7年（1770）『和錢考』を著した。
- (10) 前掲註（4）に同じ。
- (11) 増尾富房 1995「近世古錢家列伝第7回 朽木竜橋候」『季刊方泉處』9。
- (12) ティチングは、3度江戸参府を行った。うち2回は、將軍への御礼言上のためであり、両者は肝胆相照らす仲になった（東野治之 1997「貨幣収集家 朽木昌綱」『貨幣の日本史』朝日選書 574）。

- (13) 真篆対になるものを符合させるというのは、面文字だけでなく、銅色・背・穿孔・厚さ・大きさが全て合致する必要があった。発見者は大坂の安田而唐とされる（前掲註（4）に同じ）。
- (14) 増尾富房 1995「近世古銭家列伝第8回 青木昆陽」『季刊方泉處』11。
- (15) 脇田修 1986『近世大坂の町と人』人文書院、同 1994『近世大坂の経済と文化』人文書院。
- (16) 前掲註（4）に同じ。
- (17) 前掲註（2）に同じ。
- (18) 伊勢は早くから古銭蒐集が大流行した地で、明治に至るまでそれは続いた（前掲註（4）に同じ）。
- (19) 山本命 2019「古銭蒐集家としての松浦武四郎」内川隆志編『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』報告書Ⅱ。
- (20) 増尾富房 1993「近世古銭家列伝第3回 成島柳北」『季刊方泉處』3。
- (21) 間宮尚子 1990『今井貞吉』高知市民図書館。
- (22) 拙稿 2020「古銭蒐集をめぐる明治期好古家の様相—根岸武香の蒐集とその交友」内川隆志編『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』報告書Ⅲ。

（鎌形慎太郎・内川隆志）

3. イエナ大学東洋銭貨陳列室所蔵のシーボルト銭貨コレクションの分析 —基礎作業としての冊子の再整理とその問題—

(1) シーボルト銭貨コレクションの概要

陳列室では、銭貨（実物資料）が収められたトレイ 47 枚、拓本？（収録資料）が収められた冊子 2 冊が確認された。

・ 銭貨（実物資料）

本章でシーボルト銭貨コレクションと呼称する実物資料は、47 枚のトレイに 1090 枚が収められている。トレイには仕切りで約 4.5cm 四方の空間が 36 個作られ、その中に銭貨が 1 枚ずつ収められている（図 5）。この空間よりも大きな銭貨は別のトレイにまとめて収められていた。

銭貨には銭銘や鑄造地、重量などが記されたラベルが 1 枚ずつ付けられている（表 2）。ラベルには請求番号と推測される Inv.Nr. が付番されており、1～925 までのまとまりと、2001～2242 までのまとまりがあった（欠番含む）。実物資料は、2つのコレクションから構成されていた可能性がある。

同大学のホームページによれば、陳列室では 1920～1990 年代半ば頃まで研究が停滞し、その間、資料の一部が大学から持ち出されたこともあったようである。1990 年代に資料の収集と研究が再開され、持ち出された資料も大学に戻ったという。ラベルはプリンターで印字されており、研究再開後に作成されたものであろう。

後述するように、冊子の収録資料には通し番号が付番されており、その番号には Inv.Nr. と一致するもの、鉛筆で Inv.Nr. が修正番号として書き込まれたものなどがある。番号の修正は、Inv.Nr. の元になった番号があったことをうかがわせる。ラベル作成の根拠となった原資料があったと考えられるが、今回の調査では確認することができなかった。同大学ホームページによれば、研究停滞期に関係資料も散逸したらしく、そのために原資料を確認することができなかったのだろうか。



図 5 銭貨の格納状況（左：トレイの格納状況、右：トレイ内での銭貨整理状況）

・ 冊子と収録資料

冊子の構成 収録資料 990 点は冊子 2 冊（便宜上、冊子 A・B と呼称）に収められている。収録資料は台紙の片面に貼り付けられ、冊子 A には台紙 42 枚 657 点、冊子 B には台紙 12 枚 333 点が綴じられていた（図 6）。基本的に、収録資料の上には通し番号が、下には銭銘と鑄造年とおぼしき数字がペンで書かれているが、そのような情報がない収録資料もあった。また、台紙の右上には鉛筆によって通し番号（ページ

表 2 ラベルの記載事項

ラベル原文	ラベル日本語訳
Orientalisches Münzkabinett Jena	イエナ大学東洋銭貨陳列室
Inv.Nr. : 0-0022	請求番号 0-0022
Qing	清
qian long tong bao	乾隆通寶
Rev. : boo ciowan	裏面：寶泉
1736-1795	1736-1795
Ref. : H22.0200	参照：H22.0200
4.68g	4.68 g

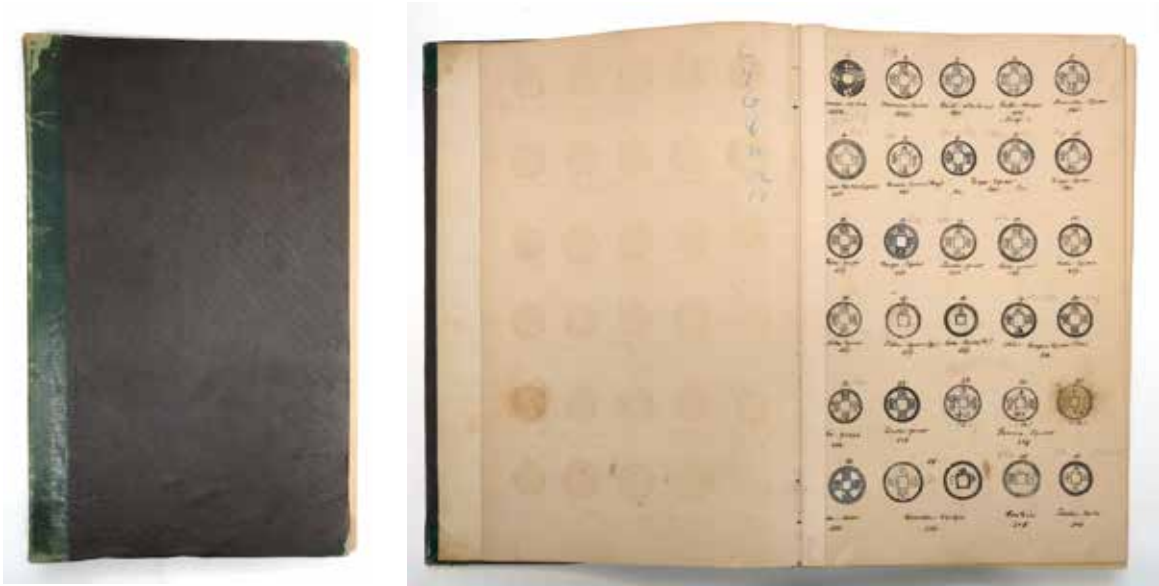


図6 銭貨の収録資料が収められた冊子（写真は冊子A—台紙1）

番号?) が書かれていた。

収録資料に振られた通し番号は、冊子Aが1～190（台紙1～11）と1～195（台紙12～31）であり、台紙33以降ではほとんど付番されていない。冊子Bは1～333まで振られており、全ての収録資料が付番されていた。なお、冊子Aで収録資料の点数と付番とが一致しないのは、同じ番号が2回振られたケースがあるためである。

表3は、冊子A・Bの構成を簡単にまとめたものである。おおむね日本銭、日本の絵銭・護符類、中国銭、中国の絵銭・護符類と国別・種別ごとにまとめられていた。この表からは、2～3冊分の台紙が冊子Aとして一冊にまとめられたこともうかがわせる。一方、冊子Bは、台紙11に中国絵銭・護符類と日本銭が整然と並べられており、分割することができない。最初からひとつのまとまりとして冊子Bになったと考えたい。

また、冊子Aでは日本銭から台紙が綴じ込まれているのに対し、冊子Bでは中国銭から台紙が綴じ込まれているという違いが見られた。

陳列室には、シーボルトが参照したと考えられる古銭書2冊（『和漢古今泉貨鑑 古文銭』（寛政元年・1789）と『新校正孔方図鑑』（文化12年・1815））が残されている。川見典久は17世紀末頃～19世紀半ば頃までの古銭書を概観し、享保年間（1716～1736）には古銭書の体裁が整うようになったこと、『新撰銭譜』（天明元年・1781）が成立してからは銭銘の字体の違いが意識されるようになったとしている。『和漢古今泉貨鑑』は『新撰銭譜』を著した朽木昌綱によるものであり、これまで刊行された古銭書の集大成として位置づけられるともいう⁽¹⁾。

『和漢古今泉貨鑑』の巻数は20あり、巻1～4が中国銭他(古文銭は巻1)、巻5に日本銭他、巻9～11が「厭勝品」（絵銭・

表3 冊子A・Bの構成と収録資料数

冊子A

台紙番号	鑄造国（鑄造地）	点数
1～4 上段	日本銭	68
4 下段～11	日本絵銭・護符類	114
12～20	中国銭	123
21～31	中国絵銭・護符類	74
32		
33～34	日本銭	68
35～41	日本絵銭・護符類	178
42	日本銭・中国銭	32
合計		657

冊子B

台紙番号	鑄造国（鑄造地）	点数
1～10	中国銭	281
11 上段	中国絵銭・護符類	4
11 下段	日本銭	12
12	日本絵銭・護符類	36
合計		333

護符類)、巻 15 が「近代和銭」(おおむね近世に鑄造された日本銭)である。『新校正孔方図鑑』も中国銭から配置しており、冊子 B はこの 2 冊を参考に構成された可能性がある。

ところが冊子 A は『和漢古今泉貨鑑』や『新校正孔方図鑑』、冊子 B と配置を違えており、シーボルトにながしかの意図があったことをうかがわせる。

収録資料(銭貨)の概要 絵銭・護符類を除き、日本銭 58 種、琉球銭 3 種、中国銭 150 種、安南銭 41 種、朝鮮銭 8 種であった(表 4～表 8)。日本銭では 1877(明治 10)年の紀年銘を持つ銅貨が、中国銭ではイギリス統治下の香港で発行された香港一仙(1 セントコイン)がいちばん新しい。コインの裏面にはビクトリア女王の陽刻があり、1877～1901 年に鑄造されたものであろう。

冊子 A に綴じ込まれた封書 研究停滞期に関係資料が散逸したこともあって、陳列室成立期にどのような整理がなされたのか、停滞期に資料がどのように扱われてきたのか不明な点が多い。しかし、わずかながら当時の状況を推測する手がかりもあり、冊子 A には 1953 年・1955 年と書かれた封書が挟み込まれていた(図 7)。

【封書表面】

Rechnun gsjahr 1953 (1953 会計年度)

【封書裏面】

- Vermögensverwaltung - (資産運用管理)

Jena, den 19.November 1955 (イエナ大学 1955 年 11 月 19 日)

An das

Archaeologische Institut (考古学研究所(あるいは考古学協会)へ)

Wir vermuten, dass die beiliegenden Aufzeichnungen für die Auswertung der Munzsammlung nützlich sein können und übersenden ihnen aus diesem Grunde diese Unterlage. (同封のメモは銭貨コレクションの評価に役立つと思われるため、この文書をお送りします。)

Archaeologische Institut (考古学研究所(あるいは考古学協会))の具体的な組織名は不明であるが、1950 年代にはシーボルト銭貨コレクションが陳列室から搬出されたことをうかがわせる。

表4 冊子に収録された日本銭

銭銘	鑄造地	鑄造年(初鑄年)	銭銘	鑄造地	鑄造年(初鑄年)
無文銀銭		7世紀頃?	(万治2年~貞享2年)		
無文銅銭		7世紀頃?	祥符元寶		
白雉珍寶		672~682(白雉年間)?	(楷書体)	長崎貿易銭	1659~1685
和同開珎	皇朝十二銭	708(和銅元年)	(万治2年~貞享2年)		
萬年通寶	皇朝十二銭	760(天平宝字4年)	嘉祐通寶		
神功開寶	皇朝十二銭	765(天平神護元年)	(楷書体)	長崎貿易銭	1659~1685
隆平永寶	皇朝十二銭	796(延暦15年)	(万治2年~貞享2年)		
富壽神寶	皇朝十二銭	818(弘仁9年)	熙寧元寶		
承和昌寶	皇朝十二銭	835(承和2年)	(楷書体)	長崎貿易銭	1659~1685
長年大寶	皇朝十二銭	848(嘉祥元年)	(万治2年~貞享2年)		
饒益神寶	皇朝十二銭	859(貞觀元年)	熙寧元寶		
貞觀永寶	皇朝十二銭	870(貞觀12年)	(篆書体)	長崎貿易銭	1659~1685
寬平大寶	皇朝十二銭	890(寬平2年)	(万治2年~貞享2年)		
延喜通寶	皇朝十二銭	907(延喜7年)	紹聖元寶		
乾元大寶	皇朝十二銭	958(天徳2年)	(篆書体)	長崎貿易銭	1659~1685
元開通寶	私鑄銭	中世	(万治2年~貞享2年)		
順平元寶	私鑄銭	中世	治平元寶		
天開通寶	私鑄銭	中世	(篆書体)	長崎貿易銭	1659~1685
洪武通寶			(万治2年~貞享2年)		
(加治木銭)	薩摩	1573~1593	貞享通寶	試鑄銭	1684(貞享元年)?
(天正年間)頃			元禄開珎	水戸藩試鑄銭	1688(元禄元年)?
文禄通寶		1592(文禄元年)	十銭通寶		17世紀後半?
慶長通寶		1606(慶長11年)?	銀代通寶		1704~1711(宝永年間)
元和通寶		1615・1616	寶永通寶		1708~1709
(元和元・2年)頃			(宝永5~6年)		
寬永通寶			寶永		
(二水永)?	水戸?	1626(寬永3年)?	(二字寶永)		1708~1709
寬永通寶			(宝永5~6年)		
(古寬永)		1636~1656頃	享保通寶	試鑄銭	1716(享保元年)?
(寬永13年~明暦2年頃)			寬永通寶		
寬永通寶		1636~19世紀中頃	(波銭)		1769~19世紀中頃
(寬永13年~幕末頃)			(明和6年~幕末頃)		
寬永通寶			仙臺通寶	仙台藩	1784~1787
(新寬永)		1665頃~19世紀中頃	(天明4~7年)		
(寬文3年頃~幕末頃)			天保通寶		1835~1870
元豊通寶			(天保6年~明治3年)		
(隸書体)	長崎貿易銭	1659~1685	函館通寶	松前藩	1856~19世紀中頃
(万治2年~貞享2年)			(安永3年~幕末頃)		
元豊通寶			寬永通寶		
(行書体)	長崎貿易銭	1659~1685	(鉄四文銭)		1861~19世紀中頃
(万治2年~貞享2年)			(万延元年~幕末頃)		
元豊通寶			琉球通寶	薩摩藩	1862~1862?
(篆書体)	長崎貿易銭	1659~1685	(文久2~4年?)		
(万治2年~貞享2年)			琉球通寶		
天聖元寶			(篆書)	薩摩藩	1862~1862?
(楷書体)	長崎貿易銭	1659~1685	(文久2~4年?)		
			細倉當百	仙台藩細倉鉾山	1863(文久3年)
			文久永寶		1863~1867
			(文久3年~慶應3年)		

錢銘	鑄造地	鑄造年（初鑄年）
大日本美寶	水戸藩	19世紀中頃（近世末頃）
富国強兵 （水戸虎銭）	水戸藩	19世紀中頃（幕末）
一厘銅貨 （明治8年）		1875（明治8年）
一銭銅貨		

錢銘	鑄造地	鑄造年（初鑄年）
（明治10年）		1877（明治10年）
二銭銅貨 （明治10年）		1877（明治10年）
半銭銅貨 （明治10年）		1877（明治10年）

表5 冊子に収録された琉球銭

錢銘	鑄造地	鑄造年（初鑄年）
金園世寶	尚氏（琉球）	1454～1470
大世通寶	尚氏（琉球）	1454～1460
世高通寶	尚氏（琉球）	1461～1469

表6 冊子に収録された渡来銭（中国銭）

錢銘	鑄造地	鑄造年（初鑄年）
半兩銭（前漢）	前漢（西漢）	前206頃～前118
齊刀銭（刀貨）	齊（春秋戦国）	前1046～前221
五銖銭（前漢）	前漢（西漢）	前118～後8
貨泉	新	8～23
布泉銭（王莽）	新	8～23
太平百銭	蜀漢	221～263
直百五銖	蜀漢	221～263
太和五銖	北魏	495
五銖銭（南梁）	南梁	502～557
永安五銖銭	北魏	529
常平五銖	北齊	
（南北朝時代）	550～557	
布泉銭（北周）	北周	556～581
太貨六銖	陳	557～589
開元通寶	唐	621～
乾封泉寶	唐	666～668
乾元重寶	唐	758～760
通正元寶	前蜀（五代十国）	916
天漢元寶	前蜀（五代十国）	917
乾亨重寶	南漢（五代十国）	917～925
光天元寶	前蜀（五代十国）	918
乾德元寶	前蜀（五代十国）	918～924
咸康元寶	前蜀（五代十国）	925
天符元寶	後晋（五代十国）	936～942
天福元寶	後晋（五代十国）	936～946
漢元通寶	後漢（五代十国）	947～950
周元通寶	後周（五代十国）	951～960
大唐通寶	南唐（五代十国）	954～959
唐國通寶	南唐（五代十国）	959
聖宋元寶	北宋	960～1127
宋元通寶	北宋	960～976
太平通寶	北宋	976～984

錢銘	鑄造地	鑄造年（初鑄年）
淳化元寶	北宋	990～994
至道元寶	北宋	995～997
咸平元寶	北宋	998～1003
景德元寶	北宋	1004～1007
祥符元寶	北宋	1008～1016
祥符通寶	北宋	1008～1016
天禧通寶	北宋	1017～1021
天聖元寶	北宋	1023～1032
明道元寶	北宋	1032～1033
明道通寶	北宋	1032～1033
重熙通寶	遼	1032～1055
景祐元寶	明	1034～1038
皇宋通寶	北宋	1038～1040
慶曆重寶	北宋	1041～1048
至和元寶	北宋	1054～1056
至和通寶	北宋	1054～1056
清寧通寶	遼	1055～1064
嘉祐通寶	北宋	1056～1063
嘉祐元寶	北宋	1056～1063
治平元寶	北宋	1064～1067
治平通寶	北宋	1064～1067
咸雍通寶	遼	1065～1074
熙寧重寶	北宋	1068～1077
熙寧元寶	北宋	1068～1077
大康元寶	遼	1075～1084
大康通寶	遼	1075～1084
大安元寶	遼	1085～1095
壽昌元寶	遼	1095～1100
乾統元寶	遼	1101～1110
天慶元寶	遼	1111～1120
天慶通寶	遼	1111～1120
元豐通寶	北宋	1078～1085

錢銘	鑄造地	鑄造年 (初鑄年)
元祐通寶	北宋	1086 ~ 1093
紹聖元寶	北宋	1094 ~ 1098
紹聖通寶	北宋	1094 ~ 1098
元符通寶	北宋	1098 ~ 1100
元符通寶	北宋	1098 ~ 1100
崇寧重寶	北宋	1102 ~ 1106
崇寧通寶	北宋	1102 ~ 1106
崇寧重寶	北宋	1102 ~ 1106
大觀通寶	北宋	1107 ~ 1110
政和通寶	北宋	1111 ~ 1118
政和通寶	北宋	1111 ~ 1118
重和通寶	北宋	1118 ~ 1119
宣和元寶	北宋	1119 ~ 1125
宣和通寶	北宋	1119 ~ 1125
靖康通寶	北宋	1126 ~ 1127
建炎元寶	南宋	1127 ~ 1130
建炎通寶	南宋	1127 ~ 1130
紹興通寶	南宋	1131 ~ 1162
紹興元寶	南宋	1131 ~ 1162
乾道元寶	南宋	1165 ~ 1173
淳熙元寶	南宋	1174 ~ 1189
紹熙元寶	南宋	1190 ~ 1194
慶元通寶	南宋	1195 ~ 1200
嘉泰通寶	南宋	1201 ~ 1204
開禧通寶	南宋	1205 ~ 1207
嘉定通寶	南宋	1208 ~ 1224
大宋元寶	南宋	1225 ~ 1227
紹定通寶	南宋	1228 ~ 1233
瑞平元寶	南宋	1234 ~ 1236
端平通寶	南宋	1234 ~ 1236
嘉熙通寶	南宋	1237 ~ 1240
嘉熙重寶	南宋	1237 ~ 1240
淳祐通寶	南宋	1241 ~ 1252
淳祐元寶	南宋	1241 ~ 1252
皇宋元寶	南宋	1253 ~ 1258
開慶通寶	南宋	1259
景定元寶	南宋	1260 ~ 1264
咸淳元寶	南宋	1265 ~ 1274
正隆元寶	金	1156 ~ 1161
大定通寶	金	1178 ~ 1189
泰和重寶	金	1201 ~ 1208
天盛元寶	西夏	1149 ~ 1169
皇建元寶	西夏	1210 ~ 1211
光定元寶	西夏	1211 ~ 1223
至元通寶		

錢銘	鑄造地	鑄造年 (初鑄年)
(パスパ文字)	元	1264 ~ 1294
元貞通寶	元	1295 ~ 1297
至大通寶	元	1308 ~ 1311
大元通寶		
(パスパ文字)	元	1310
天曆通寶	元	1328 ~ 1330
至元通寶	元	1335 ~ 1340
至正通寶	元	1340 ~ 1370
天佑通寶	元 (超土誠政權)	1354 ~ 1367
龍鳳通寶	元 (宋政權)	1355 ~ 1366
大義通寶	元 (陳友諒政權)	1359 ? ~ 1363
天定通寶	元 (天完国)	1359 ~ 1360
大中通寶	明	1361 ~ 1368 ?
洪武通寶	明	1368 ~ 1398
永樂通寶	明	1408 ~ 1424
宣德通寶	明	1426 ~ 1435
弘治通寶	明	1488 ~ 1505
嘉靖通寶	明	1522 ~ 1566
隆慶通寶	明	1567 ~ 1572
萬曆通寶	明	1573 ~ 1620
泰昌通寶	明	1620
天啓通寶	明	1621 ~ 1627
崇禎通寶	明	1628 ~ 1644
大明通寶	明 (南明)	1644
弘光通寶	明 (南明)	1645
隆武通寶	明 (清初)	1645 ~ 1646
永曆通寶	明 (清初)	1646 ~ 1662
大順通寶	清 (李自成政權)	1644 ~ 1649
興朝通寶	清 (孫加望政權)	1646 ~ 1647
裕民通寶	清 (耿精忠政權)	1674 ~ 1676
利用通寶	清 (吳三桂政權)	1674
昭武通寶	清 (吳三桂政權)	1678
洪化通寶	清 (吳世璠政權)	1679 ~ 1681
順治通寶	清	1644 ~ 1661
康熙通寶	清	1662 ~ 1722
雍正通寶	清	1723 ~ 1735
乾隆通寶	清	1736 ~ 1795
嘉慶通寶	清	1796 ~ 1820
道光通寶	清	1821 ~ 1850
咸豐重寶	清	1851 ~ 1860
咸豐通寶	清	1851 ~ 1861
同治重寶	清	1861 ~ 1875
太平天国	太平天国 (清末)	1851 ~ 1864
香港一仙	香港 (イギリス統治下)	1866 ~ 1941

表7 冊子に収録された渡来銭（安南銭）

銭銘	王朝	鑄造年（初鑄年）	銭銘	王朝	鑄造年（初鑄年）
大平興寶	丁朝	970～980	廣和通寶	莫朝	1541～1546
天福鎮寶	前黎朝	980～988	太平聖寶	莫朝	1592～1677
治平聖寶	李朝	1176～1210	永壽通寶	後黎朝	1658～1662
紹豊平寶	陳朝	1341～1357	安法元寶	鄭天錫政權	1700～1780？
大治元寶	陳朝	1358～1369	永盛通寶	後黎朝	1705～1720
大治通寶	陳朝	1358～1369	保泰通寶	後黎朝	1720～1729
聖元通寶	胡朝	1400	景興通寶	後黎朝	1740～1786
順天元寶	李朝	1428～1433	景興巨寶	後黎朝	1740～1786
順天元寶	後黎朝	1428～1433	泰德通寶	西山朝	1778～1788
紹平通寶	後黎朝	1434～1442	光中通寶	西山	1788～1792
大寶通寶	後黎朝	1440～1442	明命通寶	阮朝	1820～1840
大和通寶	後黎朝	1442～1454	明末定寶	安南	1882？
延寧通寶	後黎朝	1454～1459	永平通寶		不詳
天興通寶	後黎朝	1459～1460	咸愨元寶		不詳
光順通寶	後黎朝	1460～1497	玄聰尊寶		
洪德通寶	後黎朝	1470～1497	(玄聰尊寶)		不詳
景統通寶	後黎朝	1498～1504	皇元通寶		不詳
端慶通寶	後黎朝	1505～1509	皇恩通寶		不詳
洪順通寶	後黎朝	1509～1516	祥聖通寶		不詳
明德通寶	莫朝	1527～1529	祥元通寶		不詳
大正通寶	莫朝	1530～1540	天平通寶		不詳

表8 冊子に収録された渡来銭（朝鮮銭）

銭銘	王朝	鑄造年（初鑄年）
三韓通寶	高麗	1095～1104
三韓重寶	高麗	1095～1104
東国通寶	高麗	1095～1104
東国重寶	高麗	1095～1104
海東通寶	高麗	1097～1105
海東重寶	高麗	1097～1105
朝鮮通寶	李氏朝鮮	1423～1445
常平通寶	李氏朝鮮	1633～19世紀後半

(2) 冊子に収録された銭貨とその問題

・再整理によって判明した問題

イエナ大学による整理 収録資料 990 点中 700 点以上に、インクによって通し番号が振られていた。この通し番号が、シーボルトによるものである。

この通し番号と Inv.Nr. とが一致するケースがあり (図 8 上段)、Inv.Nr. ないしその元となった番号は通し番号に基づいていたのだろう。しかし、時期は不明ながら通し番号が後に鉛筆で修正されたものも多い。修正番号と Inv.Nr. と一致するものがあり (図 8 中段)、時期は不明ながら収録資料と実物資料とが照合されたことがわかる。ところが、その番号が Inv.Nr. と一致しないケースもあり (図 8 下段)、作業が相当難航したこともうかがわせる。

以上から、① 鉛筆で修正されたときに Inv. Nr. の元になった番号が振られたであろうこと、② その時期はおそらく陳列室形成期ないしそれ以降であること、③ 鉛筆で番号が修正された頃には収録資料と実物資料の照合ができなくなりつつあったであろうこと、がわかる。

前述したようにラベルの Inv.Nr. が訂正されているものもあり、研究再開後の 1990 年代以降にも照合作業はおこなわれたようであるが、途中で終わったようである。

再整理と問題① 今回の再整理により、シーボルトがコレクションを形成した頃にはあったであろう両者の整合性は、早くも陳列室形成期には失われつつあった可能性が浮かび上がった。しかし、時間はかかるにせよいつかは全点を照合することができるはずである。

ところが今回、収録資料の再整理を進める過程で、収録資料にあるが実物資料にはない、あるいは実物資料にはあるが収録資料にはない、というケースが確認された。例えば、白雉瓊寶 (冊子 A-台紙 2-31) や銀代通寶 (冊子 A-台紙 2-34) のような特徴的な銭貨は実物資料に含まれていなかった。また、慶長通寶は 5 点の収録資料 (冊子 A-台紙 2: 1 点、冊子 A-台紙 33: 3 点、冊子 A-台紙 34: 1 点) あるが、実物資料は 2 点 (O-2189、O-0532) しかないというように、収録資料の点数と実物資料の枚数が一致しないケースもあった。

今回おこなったイエナ大学東洋銭貨陳列室の調査は、シーボルトが収集した日本銭・中国銭の全体像を捉えることを目的のひとつとする。ところが、このようなケースが確認された以上、全点照合は不可能ということになる。

同大学スタッフから、実物資料にはシーボルト以外の収集者によるコレクションが相当数含まれているとの話はあった。収録資料と実物資料とのズレは、そのことを追認する。そうであるために、たとえ銭種・銭銘が一致しても、両者を同一のものであると判断することは難しいという難問も生じた。おそらく、イエナ大学がおこなった照合作業でも、同じ難問が立ちはだかったのではないだろうか。

再整理と問題② さらに、新たな問題が浮かび上がった。収録資料は全て拓本であるという前提で再整理

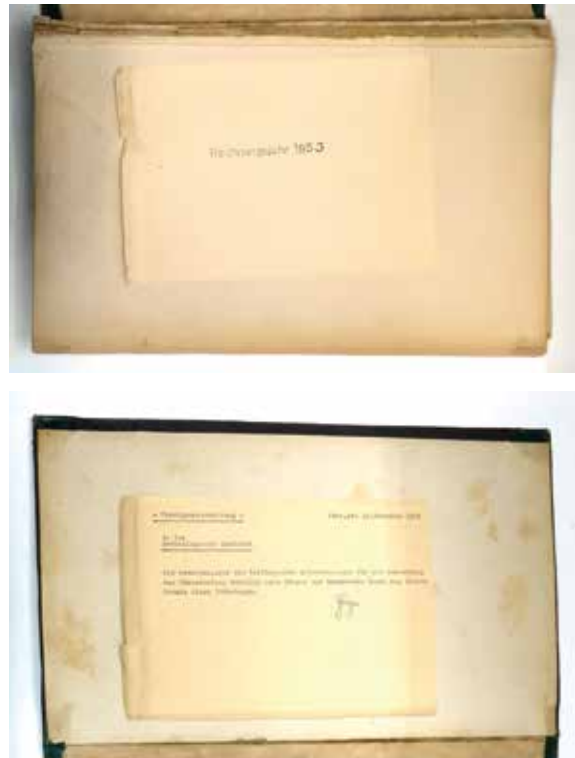
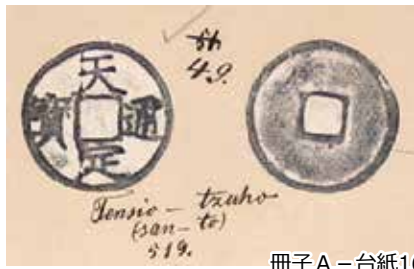


図 7 冊子 A に挟み込まれていた封書 (上: 封書表面、下: 封書裏面)



冊子A-台紙16



【ラベル原文(抜粋)】
 Inv. Nr. : O-0049
 Rebel
 tian ding tong bao (天定通寶)
 1359-1360
 9.52g



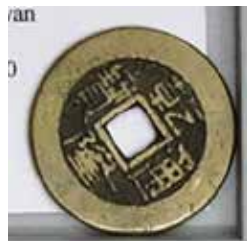
冊子A-台紙11



【ラベル原文(抜粋)】
 Inv. Nr. : O-0796
 Japanese amulet
 7 coins tree



冊子A-台紙13



【ラベル原文(抜粋)】
 Inv. Nr. : O-0022
 Qing
 qian long tong bao (乾隆通寶)
 1736-1795
 4.68g



【ラベル原文(抜粋)】
 Inv. Nr. : O-0023
 Qing
 jia qing tong bao (嘉慶通寶)
 1796-1820
 3.39g

図8 イエナ大学による収録資料と銭貨の整理

を進めたが、その過程で、拓本ではなく版木による印刷物が相当数綴じ込まれているのではないかと考えるに至った。それが、本章の冒頭で拓本?とした理由である。

例えば冊子A-台紙3は、銭貨の色調や墨の具合から、基本的に拓本が貼り込まれたものと判断できる(図9)。拓本に用いられた用紙(白色系)と台紙(明るめの薄褐色系)とで色調が異なっているところも、拓本であろうと判断できる要素である。

ところが冊子A-台紙34は、おそらく版木刷りされた台紙である(図10)。この台紙では、冊子A-台紙3で確認されたような色調の違いが認められないため、拓本のように銭貨を貼り付けたものとは考えにくい。

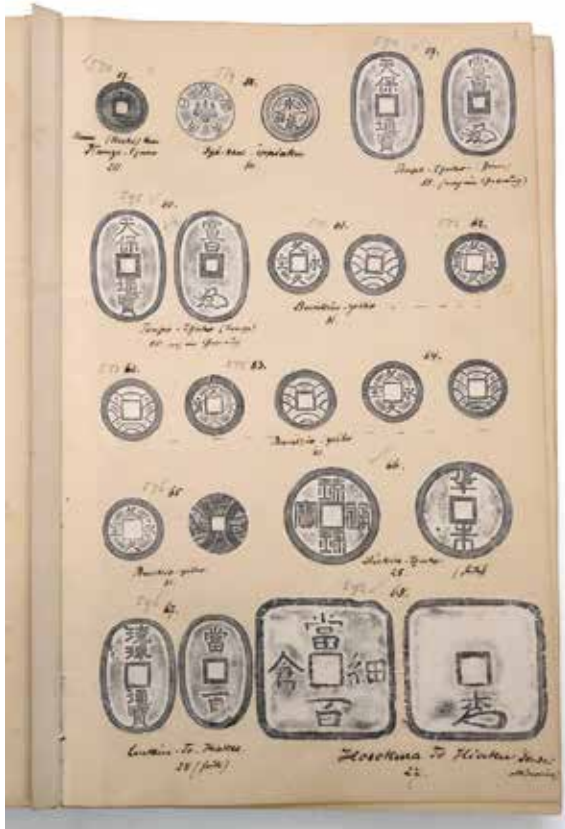


図9 拓本が貼り込まれた台紙の一例（冊子A-台紙3）

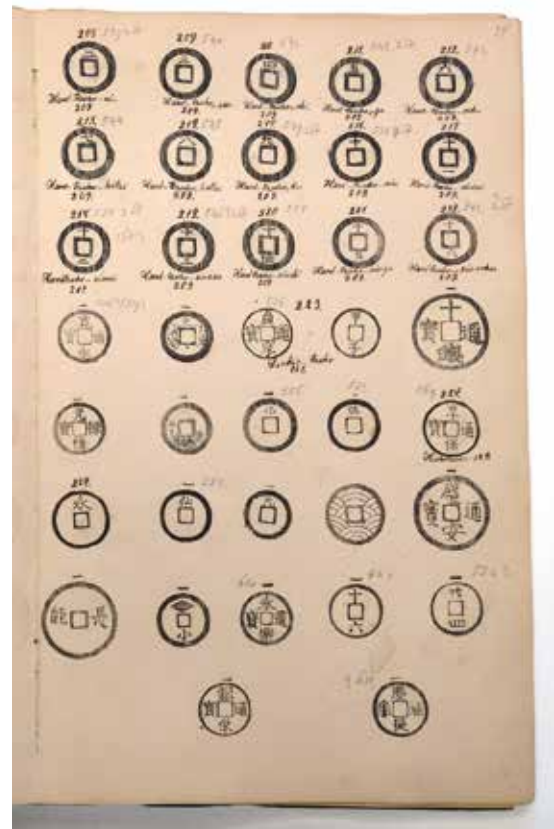


図10 版木によるものと考えられる台紙の一例（冊子A-台紙34）

また、版木を示唆する資料の一例として、冊子A-台紙34-209がある。この寛永通寶は背面に特徴があり、「文」の文字だけでなく、方孔の両隣に判読不能な文様が刻まれている（図11左）。この寛永通寶背面と同じ文様構成は、『和漢古今泉貨鑑』の「近代和銭」（巻15）にも載せられていた（図11右）。その解説に、この文様は「濟」の行書体のエラー文字であり、誰も判読できなかったとある。

川見によれば、『新撰錢譜』以降、「実物から取った拓本を元に版を起こす」ようになったという（川見2019）。『新撰錢譜』の改訂増補版とも言える『和漢古今泉貨鑑』も、当然拓本を元におこされた版である。冊子A-台紙34-209と『和漢古今泉貨鑑』の類似は、冊子A-台紙34-209が実物資料から版を起こしたのではなく、『和漢古今泉貨鑑』のような古銭書を元に作成された版である可能性を示唆する。

・ 冊子に収録された銭貨のリスト

冊子には一概に拓本と言えないものも含まれている。このような問題はあるが、冊子としてまとめられている以上、冊子にはシーボルトの関心を引いた銭貨が収録されていると考えるべきである。そこから、実物資料が入手できればそれと置き換えたであろうことも想像させる。また、冊子の編集にあたって『和漢古今泉貨鑑』や『和漢古今泉貨鑑』などの古銭書も参照されたであろうが、最終的にシーボルトの考えに基づいて構成されたと考えることができる。

冊子A・Bの構成の違いは、シーボルトの考え方の変化でもあるとみなせるため、冊子はシーボルトの興味関心に基づいて銭貨が大系化されたものという価値は損なわれない。そこで、冊子に収録された資料（銭貨）のリストを、基礎資料として表9～表14に掲載する。

なお、本章はあくまでも銭貨に焦点を当てたため、絵銭・護符類を省いた。絵銭・護符類は稿を改めて



図 11 冊子 A 一 台紙 34—209 の寛永通寶 (左) と『和漢古今泉貨鑑 近代和錢』(国立国会図書館デジタルコレクション) 掲載の寛永通寶 (右)

掲載する。

おわりに

イエナ大学が所蔵するシーボルト銭貨コレクションの全体像を把握する基礎調査として、確実なシーボルト資料とされる冊子 A・B の再整理をおこなった。その結果、冊子 A は 2～3 冊分の台紙が一冊にまとめられ、冊子 B は最初から一冊としてまとめられていたと判断した。今回は実物資料を簡単にしか扱わなかったが、Inv.Nr. のまとまりから、実物資料も少なくとも 2 つのまとまりからなる可能性が高い。同大学のホームページには、シーボルトは 2 回に渡ってコレクションを寄贈したとあるが、そのことが冊子や実物資料のまとまりにも反映されたのであろうか。

ただし、シーボルトが寄贈した頃には取れていた冊子のものであろう収録資料と実物資料との整合性は、早くも陳列室形成期には失われつつあった可能性がある。そのため、イエナ大学では 2 回ほど両者の照合作業がおこなわれたようであるが、その作業は途中で終わっている。

しかも今回の再整理により、収録資料には拓本と版木とが綴じられていることが判明した。イエナ大学の整理では版木と実物資料とを対応させているものを確認することができ、その訂正のためにも拓本と版木の峻別は重要な課題である。そういった点では作業は振り出しに戻ったようなものであるが、逆に言えば、シーボルトが実際に手に取った資料を抽出することができる、ということでもある。その資料が全て実物資料として残されているわけではなさそうだというのが残念である。

註

(1) 川見典久 2019 「江戸時代における古銭書の全貌」『古文化研究』第 18 号 黒川古文化研究所

表9 冊子A—台紙1～4上段（日本錢）

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
1	1	494		無文銅錢		7世紀頃？
1	2		(皇朝十二錢)	萬年通寶		760(天平宝字4年)
1	3		(皇朝十二錢)	隆平永寶		796(延暦15年)
1	4		(皇朝十二錢)	富壽神寶		818(弘仁9年)
1	5			文祿通寶		1592(文祿元年)
1	6	628 ?	(長崎貿易錢)	元豐通寶(隸書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	7	623	(長崎貿易錢)	元豐通寶(行書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	8	622/623	(長崎貿易錢)	元豐通寶(篆書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	9	621 ?	(長崎貿易錢)	元豐通寶(篆書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	10	669	(長崎貿易錢)	嘉祐通寶(楷書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	11		(長崎貿易錢)	熙寧元寶(楷書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	12	627	北宋？	元祐通寶		1086～1093？
1	13	614	(長崎貿易錢)	天聖元寶(楷書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	14	612	(長崎貿易錢)	祥符元寶(楷書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	15		明？	洪武通寶		1368～1398？
1	16		明？	洪武通寶		1368～1398？
1	17		(薩摩)	洪武通寶(加治木錢)	治	1573～1593(天正年間)頃
1	18		(薩摩)	洪武通寶(加治木錢)	木	1573～1593(天正年間)頃
1	19	631/632	北宋？	元符通寶		1098～1100？
1	20	629	北宋？	元符通寶		1098～1100？
1	21	630	(長崎貿易錢)	治平元寶(篆書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
1	22		北宋？	天聖元寶		1023～1032？
1	23			元和通寶		1615・1616(元和元・2年)頃
1	24			元和通寶		1615・1616(元和元・2年)頃
1	25			元和通寶	十七	1615・1616(元和元・2年)頃
1	26			【注：錢銘不明】		
1	27		(水戸藩試鑄錢)	元祿開珎	下、鷄	1688(元祿元年)？
1	28	653	前漢(西漢)？	五銖錢(前漢)		前118～後8？
1	29	654	(絵銭・護符類?)	天正大平		近世？
2	30	626	北宋？	元祐通寶		1086～1093？
2	31			慶長通寶		1606(慶長11年)？
2	32	563		白雉珎寶	廣、皇	近世？
2	33	501	(仙台藩)	仙臺通寶		1784～1787(天明4～7年)
2	34	558		銀代通寶		1704～1711(宝永年間)
2	35	560		寶永通寶	永久世用	1708～1709(宝永5～6年)
2	36	559		寶永(二字寶永)	万代通用	1708～1709(宝永5～6年)
2	37	561		寬永通寶(新寬永)		1665頃～19世紀中頃(寬文3年頃～幕末頃)
2	38	562		寬永通寶(波錢)	十一波	1769～19世紀中頃(明和6年～幕末頃)
2	39	562		寬永通寶(古寬永)		1636～1656頃(寬永13年～明暦2年頃)
2	40	562		寬永通寶(古寬永)		1636～1656頃(寬永13年～明暦2年頃)
2	41			寬永通寶	一	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)
2	42			寬永通寶	一	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)
2	43			寬永通寶	千	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)
2	44			寬永通寶	元	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)
2	45			寬永通寶	佐	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)
2	46			寬永通寶	佐	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)
2	47			寬永通寶	仙	1636～19世紀中頃(寬永13年～幕末頃)

台紙番号	番号	修正番号	铸造場所	錢貨名	錢貨裏面	铸造年（初铸年など）
2	48			寛永通寶	十	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	49		（水戸）？	寛永通寶（二水永）？	三	1626（寛永3年）？
2	50			寛永通寶	久	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	51			寛永通寶	久二	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	52			寛永通寶	川	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	53			寛永通寶	足	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	54			寛永通寶	長	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	55			寛永通寶	小	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
2	56			寛永通寶	文	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
3	57	570		寛永通寶	背星	1636～19世紀中頃（寛永13年～幕末頃）
3	58	514	（水戸藩）	大日本美寶	永泉一百	19世紀中頃（近世末頃）
3	59	594		天保通寶	當百	1835～1870（天保6年～明治3年）
3	60	595		天保通寶	當百	1835～1870（天保6年～明治3年）
3	61	571		文久永寶	十一波	1863～1867（文久3年～慶應3年）
3	62	572/573		文久永寶	十一波	1863～1867（文久3年～慶應3年）
3	63	575		文久永寶	十一波	1863～1867（文久3年～慶應3年）
3	64			文久永寶	十一波	1863～1867（文久3年～慶應3年）
3	65	576		文久永寶	十一波？	1863～1867（文久3年～慶應3年）
3	66		（薩摩藩）	琉球通寶（篆書）	半朱	1862～1862？（文久2～4年？）
3	67	596	（薩摩藩）	琉球通寶	當百	1862～1862？（文久2～4年？）
3	68	592	（仙台藩細倉鉦山）	細倉當百	秀	1863（文久3年）
4	69	593	（絵銭・護符類）？	鳳凰	八卦	
4	70	613	（松前藩）	函館通寶		1856～19世紀中頃（安永3年～幕末頃）
4	71	574		寛永通寶（鉄四文銭）	十一波、千	1861～19世紀中頃（万延元年～幕末頃）
4	72			二銭銅貨（明治10年）		1877（明治10年）
4	73			一銭銅貨（明治10年）		1877（明治10年）
4	74			半銭銅貨（明治10年）		1877（明治10年）
4	75			一厘銅貨（明治8年）		1875（明治8年）

表 10 冊子A—台紙 12～20（中国錢）

台紙番号	番号	修正番号	铸造場所	錢貨名	錢貨裏面	铸造年（初铸年など）
12	1		齊（春秋戦国）	齊刀錢（刀貨）		前1046～前221
12	2			布錢（布貨）		
12	3			布錢（布貨）		
12	4		前漢（西漢）	半兩錢（前漢）		前206頃～前118
12	5			十泉		
12	5	7		三銖錢		
12	6			絹布？		
12	8			布錢		
12	9			五銖錢		
12	10		新	布泉錢（王莽）		8～23
12	11		北周	布泉錢（北周）		556～581
12	12		北魏	永安五銖錢		529
12	13		北魏	永安五銖錢		529
13	14			大泉百十		
13	15		北魏	太和五銖		495
13	16		蜀漢	太平百錢		221～263

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
13	17		蜀漢	直百五銖		221～263
13	18		陳	太貨六銖		557～589
13	19	254 ?	南梁	五銖錢（南梁）		502～557
13	20	649	新	貨泉		8～23
13	21					
13	22		唐	乾封泉寶		666～668
13	23	22	唐	乾封泉寶		666～668
13	24		唐	乾元重寶		758～760
14	25		後晋（五代十国）	天福元寶		936～946
14	26		北宋	太平通寶		976～984
13	27		北宋	淳化元寶		990～994
14	28		遼	重熙通寶		1032～1055
14	29					
14	30					
14	31			熙寧重寶		
14	32		北宋	聖宋元寶		960～1127
14	33		北宋	崇寧重寶		1102～1106
15	34		南宋	建炎元寶		1127～1130
15	35					
14	36		北宋	宣和元寶		1119～1125
14	37		北宋	宣和元寶		1119～1125
14	38		北宋	宣和通寶		1119～1125
15	39		北宋	宣和通寶		1119～1125
15	40		南宋	紹興通寶		1131～1162
15	41		北宋	靖康通寶		1126～1127
15	42					
15	43		南宋	嘉定通寶	十三	1208～1224
15	44		南宋	淳祐通寶	當百	1241～1252
15	45	254	元	至元通寶（ハスバ文字）		1264～1294
15	46		元	元貞通寶		1295～1297
15	47		元	至大通寶		1308～1311
15	48		元（宋政權）	龍鳳通寶		1355～1366
16	49		元（天完国）	天定通寶		1359～1360
13	50	25	李朝（ベトナム）	順天元寶（ベトナム）		1428～1433
13	51		李朝（ベトナム）	順天元寶（ベトナム）	代百	1428～1433
16	52		明	大中通寶		1361～1368 ?
	53	【番号 欠】				
16	54		明	永樂通寶		1408～1424
16	55		明	萬曆通寶		1573～1620
16	56		明	崇禎通寶	王戸	1628～1644
16	56	57	明（清初）	隆武通寶	正	1645～1646
16	57	58	明（清初）	永曆通寶	壹分	1646～1662
16	58	59	清（孫加望政權）	興朝通寶	工	1646～1647
16	59	60	李自成政權（清初）	大順通寶		1644～1649
16	60	61	李自成政權（清初）	大順通寶	工？	1644～1649
16	61	62	李自成政權（清初）	大順通寶		1644～1649
16	63	63	清	乾隆通寶	宝泉（満州文字）	1736～1795
17	64	83	（ベトナム）	皇元通寶		

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
17	65	84	中国（絵銭・護符類）？	應元保運		1081？～1279？（北宋？・南宋？）
17	66	85	中国（絵銭・護符類）？	大福元寶		
17	67	86	中国？	元順通寶		
17	68	87		元國通吉		
17	69	82	（ベトナム）	皇恩通寶		
17	69	88	（私鑄銭）？	順平元寶？		中世？
17	70	89		紹元通寶		
17	71	90		天錢通寶		
17	72	91	元	天曆通寶		1328～1330
17	73	92		天鎮通寶		
17	74	93		廣●重寶		
17	75	94	（ベトナム）	天平通寶		
17	76	95		誠琢通寶		
17	77	96		常●通寶（破損）		
17	78	97	（ベトナム）	永平通寶		
17	79	98				
17	80	99	後黎朝（ベトナム）	保泰通寶	爪（左）	1720～1729
17	81	100				
17	82	101	鄭天錫政權（ベトナム）	安法元寶		1700～1780？
18	83	102	莫朝（ベトナム）	太平聖寶		1592～1677
18	84	103	（ベトナム）	祥聖通寶		
18	85	104	（ベトナム）	祥元通寶		
18	86	105		●平元寶		
18	87	106	後黎朝（ベトナム）	紹平通寶		1434～1442
18	88	107	北宋	天聖元寶		1023～1032
18	89	108	後晋（五代十国）	天符元寶		936～942
18	90	109	（長崎貿易銭）？	元豊通寶（行書体）？		1659～1685（万治2年～貞享2年）？
18	91	110				
18	92	111		●符元寶		
18	93	112				
18	94	113	北宋	元祐通寶		1086～1093
18	95	114	（長崎貿易銭）？	元豊通寶（篆書体）？		1659～1685（万治2年～貞享2年）？
18	96	115	金	大定通寶		1178～1189
18	97	116	金	大定通寶		1178～1189
18	98	117	後黎朝（ベトナム）	大和通寶		1442～1454
18	99	118		●元通寶		
18	100	119	（ベトナム）	咸愨元寶		
18	101	120	西山朝（ベトナム）	泰徳通寶		1778～1788
18	102	121	西山朝（ベトナム）	光中通寶	一	1788～1792
19	103	122				
19	104	123	阮朝（ベトナム）	明命通寶		1820～1840
19	105	124	後黎朝（ベトナム）	景興通寶		1740～1786
19	106	125			中	
19	107	64	清	嘉慶通寶	宝泉（満州文字）	1796～1820
19	108	68	清	咸豊重寶	宝泉（満州文字）、 一百	1851～1860
19	109	70	清	咸豊重寶	宝蘇（満州文字）、 當百	1851～1860

台紙番号	番号	修正番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
19	110	69	清	咸豐重寶	宝蘇（満州文字）、 當十五	1851～1860
20	111	65	清	咸豐重寶	宝源（満州文字）、 當十	1851～1860
20	112	66	清	咸豐重寶	宝福（満州文字）	1851～1860
20	113	73	清	咸豐重寶	宝源（満州文字）	1851～1860
20	114	78	清	同治重寶	宝源（満州文字）、 當十	1861～1875
20	115	76	清	同治重寶	宝源（満州文字）、 當十	1861～1875
20	116	77	清	同治重寶	宝泉（満州文字）	1861～1875
20	117	74	清	道光通寶	宝廣（満州文字）	1821～1850
20	118	75	清	道光通寶	宝源（満州文字）	1821～1850
20	119	72	清	咸豐通寶	【宝泉？】（満州文字）	1851～1861
20	120	79	大平天国（清末）	太平天国	宝蘇（満州文字）	1851～1864
20	121	50				
20	122	81	香港（イギリス統治下）	香港一仙	ビクトリア女王	1866～1941

表 11 冊子A—台紙 33～34（日本錢）

台紙番号	番号	修正番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
33				無文銀錢？		7世紀頃？
33		657？	（皇朝十二錢）	和同開珎		708（和銅元年）
33		523	（皇朝十二錢）	萬年通寶		760（天平宝字4年）
33		524	（皇朝十二錢）	萬年通寶		760（天平宝字4年）
33		530	（皇朝十二錢）	神功開寶		765（天平神護元年）
33			（皇朝十二錢）	神功開寶		765（天平神護元年）
33			（皇朝十二錢）	神功開寶		765（天平神護元年）
33		526	（皇朝十二錢）	隆平永寶		796（延暦15年）
33		521	（皇朝十二錢）	富壽神寶		818（弘仁9年）
33		522	（皇朝十二錢）	富壽神寶		818（弘仁9年）
33			（皇朝十二錢）	富壽神寶		818（弘仁9年）
33			（皇朝十二錢）	承和昌寶		835（承和2年）
33			（皇朝十二錢）	承和昌寶		835（承和2年）
33			（皇朝十二錢）	長年大寶		848（嘉祥元年）
33		525	（皇朝十二錢）	長年大寶		848（嘉祥元年）
33		528	（皇朝十二錢）	饒益神寶		859（貞觀元年）
33		531	（皇朝十二錢）	饒益神寶		859（貞觀元年）
33		527	（皇朝十二錢）	貞觀永寶		870（貞觀12年）
33		533	（皇朝十二錢）	寬平大寶		890（寬平2年）
33			（皇朝十二錢）	延喜通寶		907（延喜7年）
33			（皇朝十二錢）	乾元大寶		958（天徳2年）
33			（皇朝十二錢）	乾元大寶		958（天徳2年）
33		529		慶長通寶		1606（慶長11年）？
33	192	534		慶長通寶		1606（慶長11年）？
33				慶長通寶		1606（慶長11年）？
33		535		元和通寶		1615・1616（元和元・2年）頃

台紙番号	番号	修正番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年(初鑄年など)
33		564		元和通寶		1615・1616(元和元・2年)頃
33				元和通寶?	六	1615・1616(元和元・2年)頃
33		564?		元和通寶?	十	1615・1616(元和元・2年)頃
33				元和通寶?	六	1615・1616(元和元・2年)頃
33		532		寛永通寶(古寛永)		1636～1656頃(寛永13年～明暦2年頃)
33		565?		元和通寶?	十三	1615・1616(元和元・2年)頃
33	207	597		寛永通寶	一	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	208	539		寛永通寶	二	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	209	540		寛永通寶	三	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	210	541		寛永通寶	四	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	211	543		寛永通寶	五	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	212	547		寛永通寶	六	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	213	544		寛永通寶	七	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	214	545		寛永通寶	八	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	215	549		寛永通寶	九	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	216	538		寛永通寶	十	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	217			寛永通寶	十一	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	218	537		寛永通寶	十二	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	219	546		寛永通寶	十三	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	220	555		寛永通寶	十四	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	221			寛永通寶	十五	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	222	542		寛永通寶	十六	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34		506?/519		寛永通寶(新寛永)		1665頃～19世紀中頃(寛文3年頃～幕末頃)
34				寛永通寶(文錢)	鑄造エラー?	1636～19世紀中頃(寛永13年～幕末頃)
34	223	536	(試鑄錢)	貞享通寶	甲子	1684(貞享元年)?
34				十錢通寶		17世紀後半?
34				元禄徳寶		
34						
34		556		寛永通寶(新寛永)	佐(佐渡錢)	1665頃～19世紀中頃(寛文3年頃～幕末頃)
34		551		寛永通寶(新寛永)	佐(佐渡錢)	1665頃～19世紀中頃(寛文3年頃～幕末頃)
34	224	569	(試鑄錢)	享保通寶	永	1716(享保元年)?
34		552		寛永通寶(新寛永)	仙(仙台石巻錢)	1665頃～19世紀中頃(寛文3年頃～幕末頃)
34				寛永通寶(新寛永)	元(高津錢)	1665頃～19世紀中頃(寛文3年頃～幕末頃)
34				寛永通寶(波錢)	二十一波	1769～19世紀中頃(明和6年～幕末頃)
34			(絵錢)?	慶安通寶		近世
34			(絵錢)?		能長	近世
34			(絵錢)?			近世
34		610		永楽通寶(私鑄錢)		近世?
34		542			十六	
34		554?			六四	
34				銀栄通寶		
34		611?		慶長通寶		1606(慶長11年)?

表 12 冊子A—台紙 42 (日本銭・中国銭)

台紙 番号	番号	修正番号	鑄造場所	銭貨名	銭貨裏面	鑄造年 (初鑄年など)
42		577	(長崎貿易銭)	熙寧元寶 (楷書体)		1659 ~ 1685 (万治2年~貞享2年)
42		618	北宋	元祐通寶		1086 ~ 1093
42	225	617	(長崎貿易銭)	紹聖元寶 (篆書体)		1659 ~ 1685 (万治2年~貞享2年)
42			(私鑄銭)	天開通寶		中世
42		624		元壽通寶		
42						
42		695	明	洪武通寶 (加治木銭)	加	1368 ~ 1398
42		66/607/608	明	洪武通寶 (加治木銭)	治	1368 ~ 1398
42	226	615	明	大中通寶		1361 ~ 1368 ?
42	227	619	北宋	元符通寶		1098 ~ 1100
42				元福通寶		
42		638	(私鑄銭?)	元通通寶		中世?
42			南唐 (五代十国)	唐國通寶		959
42	228	633	(私鑄銭?)	元通通寶		中世?
42			(私鑄銭?)	元通通寶		中世?
42						
42		616				
42						
42	229	566	(長崎貿易銭?)	元豐通寶		1659 ~ 1685(万治2年~貞享2年)?
42	230	625	(長崎貿易銭?)	元豐通寶		1659 ~ 1685(万治2年~貞享2年)?
42		354/506		寛永通寶		1636 ~ 19世紀中頃 (寛永13年~幕末頃)
42					宝泉 (満州文字)	
42	231	681 ?	絵銭・護符類	大坂税町	小松	
42				永利通寶		
42	232	602		永昌通寶		
42	233	603		永昌通寶		
42	234		明	天啓通寶		1621 ~ 1627
42	235	548 ?	明	永樂通寶		1408 ~ 1424
42	236			宣徳通寶		
42	237	506		寛永通寶		1636 ~ 19世紀中頃 (寛永13年~幕末頃)
42	238	500	明	隆慶通寶		1567 ~ 1572
42	239	604	清	康熙通寶		1662 ~ 1722

表 13 冊子B—台紙 1 ~ 10 (中国銭)

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	銭貨名	銭貨裏面	鑄造年 (初鑄年など)
1	1	213		半兩銭		
1	2	214		半兩銭		
1	3	215		半兩銭		
1	4	216		五銖銭		
1	5	217		五銖銭		
1	6	218		五銖銭		
1	7	219		大泉五十		
1	8	220	新	貨泉		8 ~ 23
1	9	221	新	貨泉		8 ~ 23

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
1	10	222	新	貨泉		8～23
1	11	223	新	貨泉		8～23
1	12	224	新	貨泉		8～23
1	13	225	新	貨泉		8～23
1	14	226	新	貨泉		8～23
1	15	227	北齊（南北朝時代）	常平五銖		550～557
1	16	228	前漢（西漢）	五銖錢（前漢）		前118～後8
1	17	229	唐	開元通寶		621～
1	18	230	唐	乾元重寶	益（益州）	758～760
1	19	231	唐	乾元重寶	二重の縁	758～760
1	20	232	唐	開元通寶	昌（昌州）	621～
1	21	233	後漢（五代十国）	漢元通寶		947～950
1	22	234	後周（五代十国）	周元通寶		951～960
1	23	235	北宋	宋元通寶		960～976
1	24	236	北宋	太平通寶		976～984
2	25	230	北宋	淳化元寶		990～994
2	26	238	北宋	淳化元寶		990～994
2	27	239	北宋	淳化元寶		990～994
2	28	240	北宋	至道元寶		995～997
2	29	241	北宋	至道元寶		995～997
2	30	242	北宋	至道元寶		995～997
2	31	243	北宋	咸平元寶		998～1003
2	32	244	北宋	景德元寶		1004～1007
2	33	245	北宋	祥符元寶		1008～1016
2	34	246	北宋	祥符通寶		1008～1016
2	35	247	北宋	天禧通寶		1017～1021
2	36	248	北宋	天聖元寶		1023～1032
2	37	249	北宋	天聖元寶		1023～1032
2	38	250	北宋	明道元寶		1032～1033
2	39	251	北宋	明道元寶		1032～1033
2	40	252	明	景祐元寶		1034～1038
2	41	253	明	景祐元寶		1034～1038
2	42	254	北宋	皇宋通寶		1038～1040
2	43	255	北宋	皇宋通寶		1038～1040
2	44	256	北宋	慶曆重寶		1041～1048
2	45	257	北宋	至和元寶		1054～1056
2	46	258	北宋	至和元寶		1054～1056
2	47	259	北宋	至和通寶		1054～1056
2	48	260	北宋	至和通寶		1054～1056
2	49	263	北宋	嘉祐通寶		1056～1063
2	50	264	北宋	嘉祐通寶		1056～1063
2	51	261	北宋	嘉祐元寶		1056～1063
2	52	262	北宋	嘉祐元寶		1056～1063
2	53	265	北宋	治平元寶		1064～1067
2	54	266	北宋	治平元寶		1064～1067
2	55	267	北宋	治平通寶		1064～1067
2	56	268	北宋	治平通寶		1064～1067
2	57	269	北宋	熙寧元寶		1068～1077
2	58	270	北宋	熙寧元寶		1068～1077

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
2	59	271	北宋	熙寧重寶		1068～1077
3	60	272	北宋	熙寧重寶		1068～1077
3	61	273	北宋	元豐通寶		1078～1085
3	62	274	北宋	元豐通寶		1078～1085
3	63	275	北宋	元祐通寶		1086～1093
3	64	276	北宋	元祐通寶		1086～1093
3	65	277	北宋	紹聖元寶		1094～1098
3	66	278	北宋	紹聖元寶		1094～1098
3	67	279	北宋	紹聖通寶		1094～1098
3	68	280	北宋	元符通寶		1098～1100
3	69	281	北宋	元符通寶		1098～1100
3	70	282	北宋	聖宋元寶		960～1127
3	71	283	北宋	聖宋元寶		960～1127
3	72	284	北宋	崇寧通寶		1102～1106
3	73	285	北宋	崇寧重寶		1102～1106
3	74	286	北宋	大觀通寶		1107～1110
3	75	287	北宋	政和通寶		1111～1118
3	76	288	北宋	政和通寶		1111～1118
3	77	289	北宋	重和通寶		1118～1119
3	78	290	北宋	重和通寶		1118～1119
3	79	291	北宋	宣和元寶		1119～1125
3	80	292	北宋	宣和元寶		1119～1125
3	81	293	北宋	宣和通寶		1119～1125
3	82	294	北宋	宣和通寶		1119～1125
3	83	295	南宋	建炎通寶		1127～1130
3	84	296	南宋	建炎通寶		1127～1130
3	85	297	南宋	紹興元寶		1131～1162
3	86	298	南宋	紹興元寶		1131～1162
3	87	299	南宋	紹興通寶		1131～1162
3	88	300	南宋	乾道元寶		1165～1173
3	89	301	南宋	乾道元寶		1165～1173
3	90	302	南宋	淳熙元寶		1174～1189
3	91	303	南宋	淳熙元寶		1174～1189
3	92	304	南宋	淳熙元寶	爪	1174～1189
3	93	305	南宋	紹熙元寶	元	1190～1194
3	94	306	南宋	慶元通寶	六	1195～1200
4	95	307	南宋	嘉泰通寶		1201～1204
4	96	308	南宋	開禧通寶	元	1205～1207
4	97	309	南宋	嘉定通寶	十三	1208～1224
4	98	310	南宋	大宋元寶	三	1225～1227
4	99	311	南宋	紹定通寶		1228～1233
4	100	312	南宋	瑞平元寶	元	1234～1236
4	101	313	南宋	嘉熙通寶	元	1237～1240
4	102	314	南宋	淳祐元寶	元	1241～1252
4	103	315	南宋	皇宋元寶	三	1253～1258
4	104	316	南宋	開慶通寶	元	1259
4	105	317	南宋	景定元寶	元	1260～1264
4	106	318	南宋	咸淳元寶	元	1265～1274
4	107	319	元	至元通寶	パスパ文字？	1335～1340

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
4	108	320	元	至大通寶		1308～1311
4	109	321	元	至正通寶	卯	1340～1370
4	110	322	明	大中通寶		1361～1368？
4	111	323	明	洪武通寶	北平	1368～1398
4	112	324	明	永樂通寶		1408～1424
4	113	325	明	宣徳通寶		1426～1435
4	114	326	明	弘治通寶		1488～1505
4	115	327	明	嘉靖通寶		1522～1566
4	116	328	明（清初）	大明通寶	福	1644
4	117	329	明	隆慶通寶		1567～1572
4	118	330	明	萬曆通寶		1573～1620
4	119	331	明	泰昌通寶		1620
4	120	332	明	天啓通寶		1621～1627
4	121	333	明	崇禎通寶		1628～1644
4	122	334	明（清初）	弘光通寶		1645
4	123	335	明（清初）	隆武通寶		1645～1646
4	124	336	明（清初）	永曆通寶	督	1646～1662
4	125	337	清	順治通寶	一厘、東	1644～1661
4	126	338	清	康熙通寶	宝泉	1662～1722
4	127	339	清	雍正通寶	宝泉	1723～1735
4	128	340	清	乾隆通寶	宝武	1736～1795
4	129	341	清	嘉慶通寶	宝浙	1796～1820
5	130	342	前蜀（五代十国）	通正元寶		916
5	131	343	前蜀（五代十国）	天漢元寶		917
5	132	344	前蜀（五代十国）	光天元寶		918
5	133	345	前蜀（五代十国）	乾徳元寶		918～924
5	134	346	前蜀（五代十国）	咸康元寶		925
5	135	347	南漢（五代十国）	乾亨重寶		917～925
5	136	348	唐	開元通寶		621～
5	137	349	南唐（五代十国）	唐國通寶		959
5	138	350	南唐（五代十国）	唐國通寶		959
5	139	351	南唐（五代十国）	大唐通寶		954～959
5	140	352	遼	清寧通寶		1055～1064
5	141	353	遼	咸擁通寶		1065～1074
5	142	354	遼	大康元寶		1075～1084
5	143	355	遼	大康通寶		1075～1084
5	144	356	遼	大安元寶		1085～1095
5	145	357	遼	壽昌元寶		1095～1100
5	146	358	遼	乾統元寶		1101～1110
5	147	359	遼	天慶元寶		1111～1120
5	148	360	遼	天慶通寶		1111～1120
5	149	361	西夏	天盛元寶		1149～1169
5	150	362	西夏	皇建元寶		1210～1211
5	151	363	西夏	光定元寶		1211～1223
5	152	364	金	正隆元寶		1156～1161
5	153	365	金	大定通寶		1178～1189
5	154	366	元（超土誠政権）	天佑通寶		1354～1367
5	155	367	元（宋政権）	龍鳳通寶		1355～1366
5	156	368	元（天完国）	天定通寶		1359～1360

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
5	157	369	明	天啓通寶		1621～1627
5	158	370	元（陳友諒政権）	大義通寶		1359？～1363
5	159	371	清（呉三桂政権）	昭武通寶		1678
5	160	372	清（呉三桂政権）	利用通寶		1674
5	161	373	清（呉世璠政権）	洪化通寶		1679～1681
5	162	374	清（耿精忠政権）	裕民通寶		1674～1676
6	163	375	高麗（朝鮮）	海東通寶		1097～1105
6	164	376	高麗（朝鮮）	海東通寶		1097～1105
6	165	377	高麗（朝鮮）	海東重寶		1097～1105
6	166	378	高麗（朝鮮）	三韓通寶		1095～1104
6	167	379	高麗（朝鮮）	三韓通寶		1095～1104
6	168	380	高麗（朝鮮）	三韓重寶		1095～1104
6	169	381	高麗（朝鮮）	東国通寶		1095～1104
6	170	382	高麗（朝鮮）	東国通寶		1095～1104
6	171	383	高麗（朝鮮）	東国重寶		1095～1104
6	172	384	李氏朝鮮	朝鮮通寶		1423～1445
6	173	385	李氏朝鮮	常平通寶		1633～19世紀後半
6	174	386	後黎朝（ベトナム）	順天元寶		1428～1433
6	175	387	後黎朝（ベトナム）	紹平通寶		1434～1442
6	176	388	後黎朝（ベトナム）	大寶通寶		1440～1442
6	177	389	後黎朝（ベトナム）	大和通寶		1442～1454
6	178	390	後黎朝（ベトナム）	延寧通寶		1454～1459
6	179	391	後黎朝（ベトナム）	天興通寶		1459～1460
6	180	392	後黎朝（ベトナム）	光順通寶		1460～1497
6	181	393	後黎朝（ベトナム）	洪徳通寶		1470～1497
6	182	394	後黎朝（ベトナム）	景統通寶		1498～1504
6	183	395	後黎朝（ベトナム）	端慶通寶		1505～1509
6	184	396	後黎朝（ベトナム）	洪順通寶		1509～1516
6	185	397	莫朝（ベトナム）	明德通寶		1527～1529
6	186	398	莫朝（ベトナム）	大正通寶		1530～1540
6	187	399	莫朝（ベトナム）	廣和通寶		1541～1546
6	188	400	後黎朝（ベトナム）	景興通寶		1740～1786
6	189	401	後黎朝（ベトナム）	景興通寶		1740～1786
6	190	402	後黎朝（ベトナム）	景興巨寶		1740～1786
6	191	403	尚氏（琉球）	大世通寶		1454～1460
6	192	404	尚氏（琉球）	世高通寶		1461～1469
7	193	405	丁朝（ベトナム）	大平興寶		970～980
7	194	406	前黎朝（ベトナム）	天福鎮寶		980～988
7	195	407	陳朝（ベトナム）	大治元寶		1358～1369
7	196	408	陳朝（ベトナム）	大治通寶		1358～1369
7	197	409	尚氏（琉球）	金園世寶		1454～1470
7	198	410	鑄造地不明	平安通寶		鑄造年不明
7	199	411	後黎朝（ベトナム）	永壽通寶		1658～1662
7	200	412	後黎朝（ベトナム）	永盛通寶		1705～1720
7	201	413	安南（ベトナム）	明宋定寶		1882？
7	202	414	（ベトナム）	玄聡尊寶（玄聰尊寶）		
7	203	415	日本	元和通寶		1615・1616（元和元・2年）頃
7	204	416	北宋	宋元通寶		960～976
7	205	417	北宋	天禧通寶		1017～1021

台紙 番号	番号	修正 番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年(初鑄年など)
7	206	418	鄭天錫政權(ベトナム)	安法元寶		1700～1780?
7	207	419	胡朝(ベトナム)	聖元通寶		1400
7	208	420	陳朝(ベトナム)	紹豊平寶		1341～1357
7	209	421	莫朝(ベトナム)	太平聖寶		1592～1677
7	210	422	李朝(ベトナム)	治平聖寶		1176～1210
7	211	423		紹符元寶?		
7	212	424	金	正隆元寶		1156～1161
7	213	425		永利通寶		
7	214	426	(私鑄錢?)	元通通寶		中世?
7	215	427	私鑄錢?	大元通寶(漢字)		
7	216	428	(私鑄錢)	元開通寶		中世
8	217	429	(長崎貿易錢)	元豊通寶(行書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
8	218	430	(長崎貿易錢)	元豊通寶(篆書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
8	219	431	北宋	元祐通寶		1086～1093
8	220	432	北宋	元祐通寶		1086～1093
8	221	433	北宋	紹聖元寶		1094～1098
8	222	434	(長崎貿易錢)	紹聖元寶(篆書体)		1659～1685(万治2年～貞享2年)
8	223	435	北宋	元符通寶		1098～1100
8	224	436	北宋	元符通寶		1098～1100
8	225	437	北宋	聖宋元寶		960～1127
8	226	438	北宋	聖宋元寶		960～1127
8	227	439	北宋	政和通寶		1111～1118
8	228	440	北宋	政和通寶		1111～1118
8	229	441	北宋	宣和通寶		1119～1125
8	230	442	北宋	宣和通寶		1119～1125
8	231	443	南宋	建炎通寶		1127～1130
8	232	444	南宋	建炎通寶		1127～1130
8	233	445	南宋	紹興元寶		1131～1162
8	234	446	南宋	紹興元寶		1131～1162
8	235	447	南宋	紹興通寶		1131～1162
8	236	448	南宋	淳熙元寶		1174～1189
8	237	449	南宋	淳熙元寶	瓜、点	1174～1189
8	238	450	南宋	紹熙元寶	二	1190～1194
8	239	451	南宋	慶元通寶	五	1195～1200
8	240	452	南宋	嘉泰通寶	元	1201～1204
8	241	453	南宋	開禧通寶	三	1205～1207
8	242	454	南宋	嘉定通寶	二	1208～1224
8	243	455	南宋	大宋元寶		1225～1227
8	244	456	南宋	紹定通寶		1228～1233
9	245	457	南宋	嘉熙通寶	四	1237～1240
9	246	458	南宋	淳祐元寶	四	1241～1252
9	247	459	南宋	皇宋元寶		1253～1258
9	248	460	南宋	開慶通寶	元	1259
9	249	461	南宋	景定元寶		1260～1264
9	250	462	南宋	咸淳元寶		1265～1274

台紙番号	番号	修正番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
9	251	463	元	至正通寶		1340～1370
9	252	464	明	大中通寶		1361～1368？
9	253	465	明	洪武通寶		1368～1398
9	254	466	明	崇禎通寶		1628～1644
9	255	467	明（清初）	隆武通寶		1645～1646
9	256	468	元（天完国）	天定通寶		1359～1360
9	257	469	元（陳友諒政権）	大義通寶		1359？～1363
9	258	470	清（呉三桂政権）	利用通寶		1674
9	259	471	清（耿精忠政権）	裕民通寶		1674～1676
9	260	472	李氏朝鮮	常平通寶		1633～19世紀後半
9	261	473	明（清初）	永曆通寶		1646～1662
9	262	474	明（清初）	永曆通寶		1646～1662
9	263	475	北宋	崇寧通寶		1102～1106
9	264	476	北宋	崇寧重寶		1102～1106
9	265	477	北宋	大觀通寶		1107～1110
9	266	478	南宋	慶元通寶		1195～1200
10	267	479	南宋	嘉泰通寶		1201～1204
10	268	480	南宋	端平通寶		1234～1236
10	269	481	南宋	嘉熙重寶		1237～1240
10	270	482	金	泰和重寶		1201～1208
10	271	483	元	大元通寶（ハスパ文字）		1310
10	272	484	元	至正通寶		1340～1370
10	273	485	元	至正通寶		1340～1370
10	274	486	明	大中通寶		1361～1368？
10	275	487	明	大中通寶		1361～1368？
10	276	488	明	大中通寶		1361～1368？
10	277	489	明	洪武通寶		1368～1398
10	278	490	明	洪武通寶		1368～1398
10	279	491	明	洪武通寶	三福	1368～1398
10	280	492	明	天啓通寶	十	1621～1627
10	281	493	清（孫加望政権）	興朝通寶	壹分	1646～1647

表 14 冊子B－台紙 12（日本錢）

台紙番号	番号	修正番号	鑄造場所	錢貨名	錢貨裏面	鑄造年（初鑄年など）
11	286		（皇朝十二錢）	和同開珎		708（和銅元年）
11	287		（皇朝十二錢）	萬年通寶		760（天平宝字4年）
11	288		（皇朝十二錢）	神功開寶		765（天平神護元年）
11	289	643	（皇朝十二錢）	隆平永寶		796（延暦15年）
11	290		（皇朝十二錢）	富壽神寶		818（弘仁9年）
11	291		（皇朝十二錢）	承和昌寶		835（承和2年）
11	292		（皇朝十二錢）	長年大寶		848（嘉祥元年）
11	293		（皇朝十二錢）	饒益神寶		859（貞觀元年）
11	294		（皇朝十二錢）	貞觀永寶		870（貞觀12年）
11	295		（皇朝十二錢）	延喜通寶		907（延喜7年）
11	296		（皇朝十二錢）	乾元大寶		958（天徳2年）
11	297		（皇朝十二錢）	寛平大寶		890（寛平2年）

『榧園好古図譜』第一冊について

内川隆志・樋口典昭

はじめに

『榧園好古図譜』は、根岸武香（1839-1902）が蒐集した埴輪や土器、古瓦、武具、玉類などの考古遺物を中心に編んだ四冊から成り、その存在は、金井塚良一によって紹介されていたが、昭和30年代を境に所在不明となっていたものである⁽¹⁾。幸運なことにこの研究が緒についたばかりの時点で偶然にもこの図譜を入手することができない、その内容を検討し具体的な武香の蒐集品の実態が検証できるようになった。図譜には、各巻の表紙の中央に外題を揮毫するために空白が空けられているものの名称の記載が認められなかったため、武香の雅号の「榧園」と好古をよくした武香の業績を称える意味を込めて、この図譜を『榧園好古図譜』と命名することとした。その詳細については研究の進捗に合わせて順次報告する予定ではあるが、本稿では、紙面の関係から武香の思い入れの強かった埴輪類を主として掲載している第一冊（図12～図33）に関してその概要を紹介する。

1. 『榧園好古図譜』について

図譜の寸法は、縦37.3cm×横26.5cmを計り、それぞれ布貼りの表紙、裏表紙には手書きの桜花・菊花・杜若・撫子・桔梗など各種の花柄が直筆で描かれ装丁されており、右上端には2cm×1.2cmの貼紙が糊付けされ、墨書の符号が記されている。本紙は折本ではなく厚葉の鳥の子紙を小口で2枚張り合わせ施風葉状に仕立て、背もくるまらずに直に張り合わせた特殊な装丁を採用している点が特徴である。制作年代は第三冊に「上野國碓氷郡豊岡村大字豊岡字馬引明治三十一年五月五日所出」と記載されるところから、最終的には、1898（明治31）年以降、武香が没する1902（明治35）年の間に編纂されたものである事が推定できる。名称については、1903（明治36）年6月20日の武香没後一年の追悼号として編まれた『東京人類学会雑誌』に柴田常恵が「根岸君が所蔵品を圖寫せし題號未定の古物畫帖」と記しているように、この時点でも同図譜の名称は不明のままであった事が理解できる⁽²⁾。一方、同年12月10日に催された集古會有志が武香の一周忌として催した「故根岸武香翁追悼會」の記録⁽³⁾によると絵師の廣田華州が『故榧園根岸翁遺墨古物寫生帖』を出陳しており、これが本稿で紹介する『榧園好古図譜』四冊の内の一冊を示すもので、追悼会参列者に示す必要性から暫定的に命名したものなのか、あるいは現在国会図書館の青山文庫に収められている『骨董集』⁽⁴⁾のうち、各地の旅先で古物の模写に加えて墨書で細かく記録した部分が掲載されている一冊を指しているのかは判然としない。後者であるなら「遺墨古物寫生帖」の名称に合点がいくところである。いずれにしてもここに記録された『故榧園根岸翁遺墨古物寫生帖』は、『榧園好古図譜』を指したものではなさそうである。よって本図譜は、冒頭で述べたように恐らく未完成の段階で主を失った後は、命名されないまま紆余曲折を経て今日に伝わったものである。武香は生前考古図録の出版を企画していたことが山中笑（1850-1928）によって記録されており⁽⁵⁾、本図譜はその私家版ともいえる位置付けであったことが想定される。四冊に及ぶ多数の蒐集品を詳細に描いた絵師についての具体的な情報はどの図譜にも認められないが、根岸家と関わりの深い絵師の廣瀬華州の関与が濃厚である。だが、第二冊の石器類、玉類の描き方など廣瀬とは異なる技法も認められることから別絵師との関係性も推定される⁽⁶⁾。

2. 『榧園好古図譜』第一冊の内容

では、具体的に『榧園好古図譜』第一冊をみてゆくこととする。まずは表紙の右上端には2cm×1.2cm

の貼紙が糊付けされ、墨書の記号「出一二四」が附されている（図 12 左上）。見返しには「古物図根岸出品四帖」（図 12 右上）とあり何処かに貸出した時の控えとも取れる紙片が残っている。1（図 12 左下）から埴輪の描写が続いており、個々の埴輪には 1・2 を除いて 3～74 までの通し番号がふられている。

所載されている埴輪のうち、現状で所在が判明しているものについて、ここに提示した図版番号に順じてあきらかにしておく。図 34 - 1～4 は、1 に「武蔵国北埼玉郡上中条村堀地一ツケ獲 明治九年十二月二日」とあるように現埼玉県熊谷市上中条字日向島出土（鹿那祇東古墳）で武香の寄贈によって帝室博物館に寄贈され、現在重要文化財指定を受けている短甲武人埴輪である。図 34 - 5～7 は現在も根岸家が所蔵している武人埴輪頭部であり、図 34 - 11・12 も同家所蔵の人物埴輪女子頭部である。その詳細については新井端があきらかにしている⁽⁷⁾。図 34 - 13 には、前述したように柴田常恵（1877-1954）がこの図譜を見て「根岸君が所蔵品を圖寫せし題號未定の古物畫帖に、其發掘の模様等に就き詳細に自記せらるゝこと左の如し」として『東京人類学会雑誌』に全文を紹介している⁽⁸⁾。

武蔵国北埼玉郡上中条村にて、土偶をほりいたしつるは、同村の農江森善兵衛といふ人、おのれの持地なる字沼窪の畑の土をとりのけ、水田にせはやとて、明治九年十二月二日永れる土を鋤もておこすに、鋤の先にあたりしものあり、何ならんと心してほりいたすに、土焼のひとつかたなれば、かつはおとろきかつはおそれしかと 又もくはをおろすに、同じ土偶のかすノゝいてければ、はにわの事はしられされと、尊きものならむと思ふまゝに、ねもころに我家へになひはこひ、庭のつほやまの前に、少女子か彌生の雛ならへしことおきすゑたり、此事同じ村の中山孫兵衛氏よりおのかもとにしらせおこせければ、これ行て見はやと思ひしかと、年の暮とて何くれいとなかりければ、翌十年一月廿日に行てみしに、其はにわはあるは、甲冑をつけたる、あるは曲玉を首にかけたる、あるはなけ頭巾やうなるえほしつけたる、さまノゝの形ちして、古をかむかふるあかしにもならんと、ほしく思ひしかと、たれいふとなく此土偶を祈る時は、盲者は眼を開き、あしなへは立あるきなどしるしありとて、近隣の村落はさらなり、遠き所の人々の詣て祈るものむれをなしたれば、ゆつりうけん事をもちひ出かね、むなしくかへりたりき、しはしありて此事公のきく所となり、詣つる人をとゞめしかと猶やまさりければ、ついに巡查をして土偶をうちこほたしめつときゝつれば、あな心なの司人よとたゞちに人をもてとひけるに、甲冑きたると馬とのみにて、餘はことノゝくこほちつるよしなるに、かけくたけたるにてもよろしゆつりくれましくやと、中村氏をもてとひきゝつるに、今は何かせん、されと甲冑の土偶と、土馬は家へのこしおかまほしきよしいひおこせしかと、甲冑の土偶は護りくれよと再びいひやりて、破れつるとともにあかなひもとめぬるなり、又土馬は其のち帝國博物館より買上となり、いまに同館にあり、いさゝかこのよし、およひほり出しゝ時、見つる土偶のさまを左にうつしおきぬ、
榎園のあるし 武香

とあるように、1876（明治9）年12月2日に11体におよぶ武人埴輪を含む人物埴輪や馬形埴輪などが出土した状況が詳しく記録されている。明治9年前後にも埴輪出土にかかる発見記録が残されている⁽⁹⁾が、とりわけこの時には多数の埴輪が出土したため、この文章とともに図 15 - 14 にあるように出土した埴輪のスケッチが残されている。ここに記された武人埴輪は、現重要文化財の短甲武人埴輪であり、図 34 - 5～7 の武人埴輪頭部も認められる。馬形埴輪は、「土馬は其のち帝國博物館より買上となり、いまに同館にあり」と記されているように東京国立博物館所蔵の埼玉県熊谷市上中条字日向島出土（鹿那祇東古墳）の馬形埴輪であろう⁽¹⁰⁾。またスケッチされた人物埴輪頭部の中にも加須市教育委員が所蔵する資料など類似点が指摘できるものも認められる⁽¹¹⁾。さらに図 34 - 15・16 の武人埴輪頭部は、出土地の記載は認められないものの埼玉県東松山市三千塚古墳群出土資料に酷似する⁽¹²⁾。図 35 - 23 の人物埴輪女子には、「比企郡大谷村字花ノ木山林中古墳所得明治十年二月十九日」とあり、埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料と推定される⁽¹³⁾。図 35 - 27 の人物埴輪男子には、「明治十一年三月廿五日」とあ

り、東松山市教育委員会所蔵資料と推定される⁽¹⁴⁾。図35-31・32の人物埴輪男子頭部には「比企郡大谷村花ノ木古墳明治十二年二月十八日」とある。本資料は、図35-45の「大谷村字花之木」と墨書される人物埴輪胴下半部と38の「二九・三十」の貼紙が付された手甲部の埴輪片を用いて完形に復元されたものと推定される資料が、埼玉県立歴史と民俗の博物館に保管されている⁽¹⁵⁾。図35-41の人物埴輪頸部片は、「大谷村字串引古墳」と墨書され「三九」の貼紙が付されている。本資料は、図35-42に所載されている人物埴輪男子頸部と同一資料と考えられ、埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料と推定される⁽¹⁶⁾。図36-47の人物埴輪脚部は、「大谷村串引」と墨書され、「四八」の貼紙が付されている。上部と靴を欠くものの、埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料と類似することが指摘されている⁽¹⁷⁾。これらの埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料は、根岸喜夫により寄託された資料であり、金井塚によって報告されている⁽¹⁸⁾。図36-46は「同村串引」と墨書され「四二」の貼紙が付される人物埴輪脚部で、東京国立博物館が所蔵する埼玉県東松山市大谷出土の人物埴輪下半部脚部に類似している⁽¹⁹⁾。図37-49～51に所載される「大谷村字花ノ木古墳明治十年二月十九日」と墨書される馬形埴輪は東京国立博物館所蔵資料に類似している⁽²⁰⁾。図37-54の五十八・五十九の貼紙が付された鈴の埴輪片は、両者ともに東京国立博物館所蔵資料に類似している⁽²¹⁾。図37-62は、1878（明治11）年、H.v.シーボルトが根岸家を訪問した記念として贈ったテラコッタ人形である⁽²²⁾。これには箱書きが残っており、「グリシャ国土偶人 二千年外墓ニ埋葬セシモノ ヘンリーフホンシーボルト寄贈 榎園主人」とあり、武香自らが揮毫している。

図38（図28-65）以降には須恵器、土師器などの器物が所蔵される。これらのうち次に挙げる資料が現在根岸家に収蔵されており、現在整理を進めている資料である。須恵器提瓶（67）、横瓶（68）「比企郡大谷村字腰塚」の出土地名を伴う甕（70）・甕（74）、長頸壺あるいは台付壺の口縁部片の底部を塞いだコップ状加工品（72）、高坏（坏部）（75）、土師器（坏）（76・81）、土師器（小壺）（79）、土師器（埴）（80）、手握土器（80の2点）。図39-77の重圏文鏡・双孔円盤（鏡形石製品）、78の勾玉形石製品についても根岸家で所在が確認できた資料であり、すでに新井端によって報告がなされ『武蔵国大里郡吉見村誌』に「甲山村字雷船木山下 明治十一年五月廿五日 堀地所獲 大サ如図」と記録されていることから、その出土地と出土年月日が明らかとなっている⁽²³⁾。特に2021（令和3）年に、実物が根岸家で再発見された重圏文鏡については、徳田誠志によって古墳時代前期における列島全体の地域間交流や用途を考える上で極めて貴重な資料であることが指摘されている⁽²⁴⁾。

おわりに

『榎園好古図譜』第一冊に記された内容についてみてきた。ここには根岸武香がその古物蒐集人生のなかで注力を注いだ埴輪を中心に、須恵器や土師器、鏡なども含めて構成されていることを明らかにした。埴輪をめぐる好古家同士のネットワークでは、武香が所持する「土偶人」の周旋をめぐる幾つかの文書が知られている。例えば埼玉県立文書館に寄託されている根岸家文書には、松浦武四郎（1818-1888）との交流を記録した5通の書簡が含まれ、明治8年12月8日付の書簡（根岸家文書4647〔古金銀外売買二付書状〕）には、「土偶人所持人有之候由、是者何卒拙者へ御周旋願上度」など、4通に武香の所有する「土偶人」の周旋に関する記載が見受けられる⁽²⁵⁾。その際に、必ず引き合いに柏木貨一郎を出しては対抗意識をむき出しにしている内容も含まれ、実際、柏木は武香からすでに直接「土偶人」を譲り受けていた事実と、さらに重ねて周旋を依頼する書簡も残されている。また、静嘉堂文庫史料のうち、武香が武四郎に宛てた明治9年1月7日の書簡には、「明治九年一月三日本区比企郡大谷村字塚山ヲ掘リテ出ル所ノ土偶人ノ図」として、2体の人物埴輪が描かれており、4日前に大谷村字塚山から掘り出したばかりの埴輪の速報ともいえるやりとりが残されている点なども興味深い⁽²⁶⁾。このように埴輪は当時の好古家た

ちが恋い焦がれるコレクターズアイテムであり、当時その最大の蒐集家であり、埴輪そのものの供給元であった武香の存在は、当時の好古界において極めて大きい存在であったことが指摘できよう。今回は資料そのものの評価は欠いた内容となっているが、随時あきらかにしてゆく予定である。

註

- (1) 金井塚良一 1984「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館 紀要』10 埼玉県立博物館
- (2) 柴田常恵 1903「武蔵の古墳」『東京人類学会雑誌』第 18 巻第 207 号 東京人類学会 345 頁
- (3) 集古會記事 1903「故根岸武香翁追悼會」『集古會誌』甲辰卷之一 集古會 20-21 頁
- (4) 大沼宜規 2012「ある好古家のコレクション 根岸武香と甲山文庫—国立国会図書館デジタル化資料 搭載を契機として」『国立国会図書館月報』No.620 国立国会図書館 29 頁
- (5) 山中笑 1903「故根岸武香君の辭世に就いて」『東京人類学会雑誌』第 18 巻第 207 号 東京人類学会 374 頁
- (6) 廣瀬華州の関与に関しては、その作品に関して造詣の深い新井端氏からご意見を頂戴している。別 絵師の関与については稿を改めたい。
- (7) 新井端 2021「『上中条出土人物埴輪群像』について」『熊谷市史研究』第 13 号 熊谷市教育委員会
- (8) 註 (2) 345-346 頁
- (9) 註 (7) 23-24 頁
- (10) 東京国立博物館 1986『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編（関東Ⅲ）24 頁
- (11) 埼玉県立さきたま資料館 1988『「はにわ人の世界」』9 頁
- (12) 埼玉県立博物館 1984『杖刀人とその時代』67 頁、金井塚良一 1976『北武蔵考古学資料図鑑』校 倉書房
- (13) 註 (1) 10 頁
- (14) 埼玉県立博物館 1984『杖刀人とその時代』50 頁
- (15) 45・38（二九・三十）を合わせて同一個体として復元している可能性がある。註 (1) 9 頁
- (16) 註 (1) 20 頁
- (17) 註 (1) 11 頁
- (18) 註 (1)
- (19) 註(10)30 頁。金井塚は本資料を埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料との類似を指摘しているが、 資料の破損状況から、東京国立博物館所蔵資料である蓋然性が高い。註 (1) 21 頁
- (20) 後藤守一 1942『埴輪』アルス
- (21) 註 (10) 36 頁
- (22) 内川隆志 2020『古物を守り伝えた人々好古家たち』國學院大學博物館 14 頁
- (23) 熊谷市教育委員会社会教育課市史編さん室編 2015『甲山根岸家資料報告(1) — 考古資料・古瓦一』 熊谷市調査研究報告書第 1 集
- (24) 徳田誠志 2022「根岸武香旧蔵の重圈文鏡について」『人文資料形成史における博物館学敵研究 - 根 岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開』I 近代博物館形成史研究会 12-26 頁
- (25) 三浦泰之 2010「埼玉県立文書館所蔵根岸武香関係文書にある松浦武四郎関係資料」『松浦武四郎 研究会会報』第 59 号 松浦武四郎研究会
- (26) 内川隆志・宇野淳子 2013「明治前期における好古家の実相 - 松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人蒐集 集をめぐって -」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 5 号 國學院大學研究開発推進機構



表紙



本扉



1

武藏國北埼玉郡上中條村掘地所獲
明治九年十二月二日

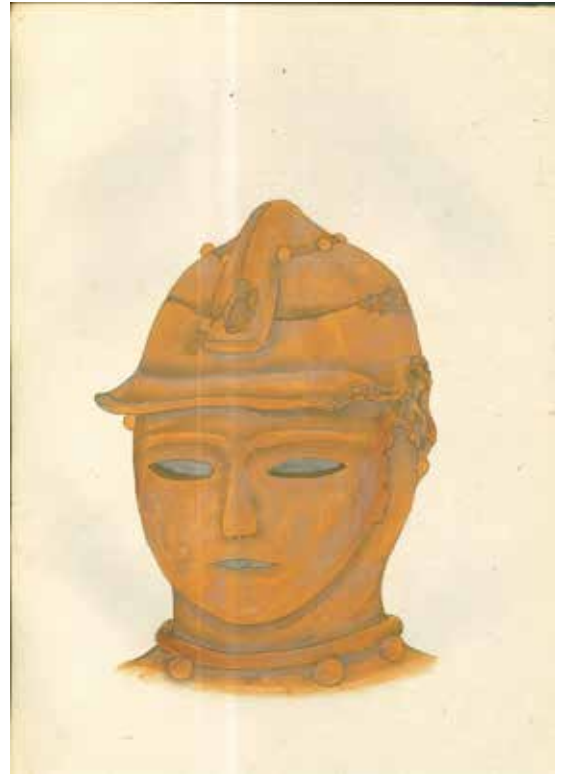


2

図12 『榎園好古図譜』第一冊(一)



3



4



5



6

图 13 『榎園好古図譜』 第一冊 (二)



7



8



9

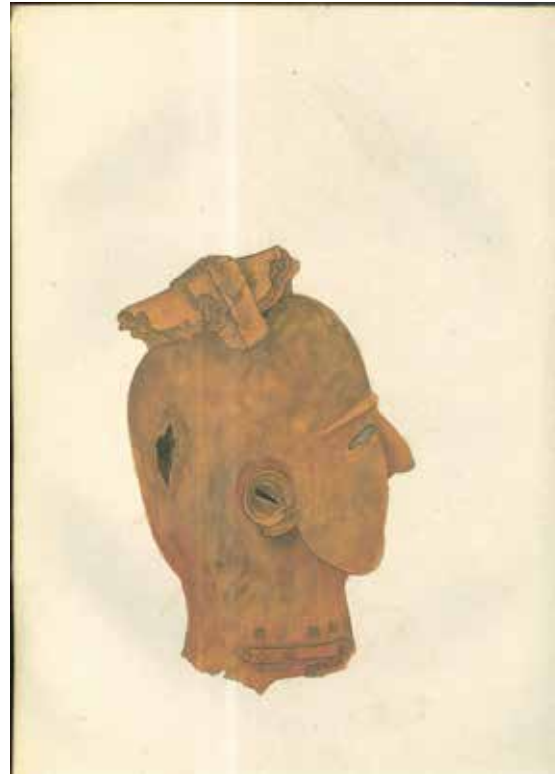


10

图 14 『榷園好古圖譜』第一冊 (三)



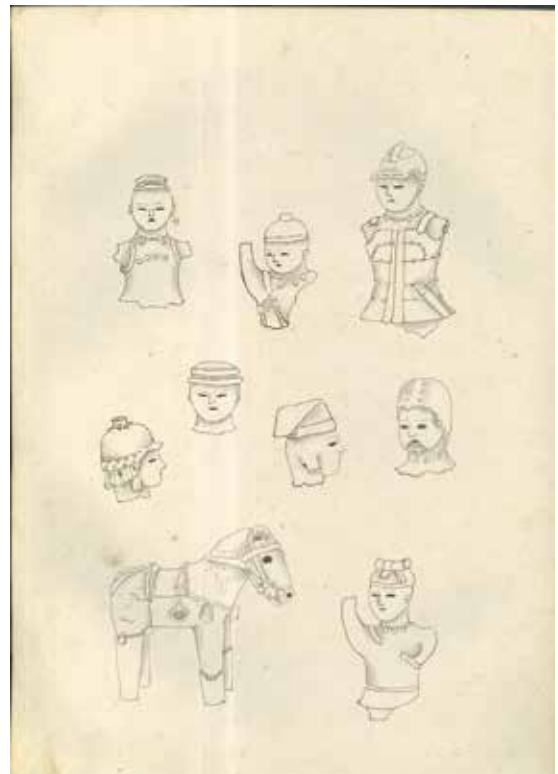
11



12



13



14

図15 『榎園好古図譜』第一冊(四)



15



16



17



18

图 16 『榷園好古圖譜』第一冊 (五)



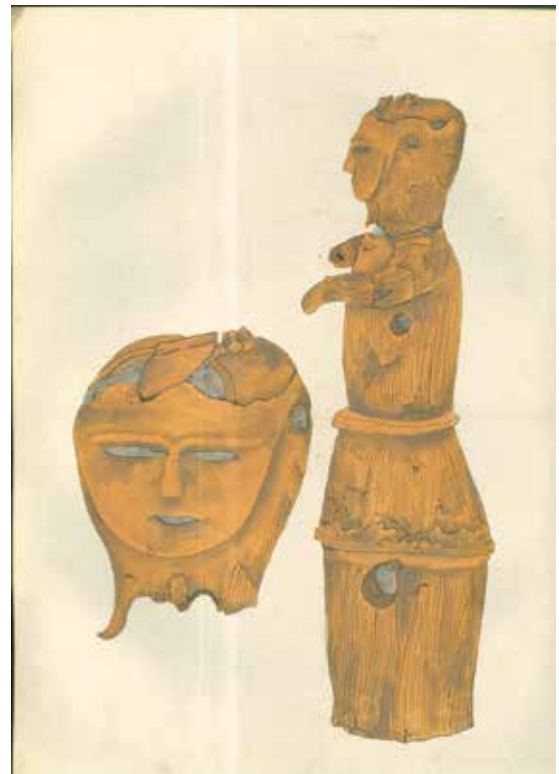
19



20



21



22

圖 17 『榧園好古図譜』 第一冊 (六)



23



24



25



26

图 18 『榷園好古圖譜』第一冊 (七)

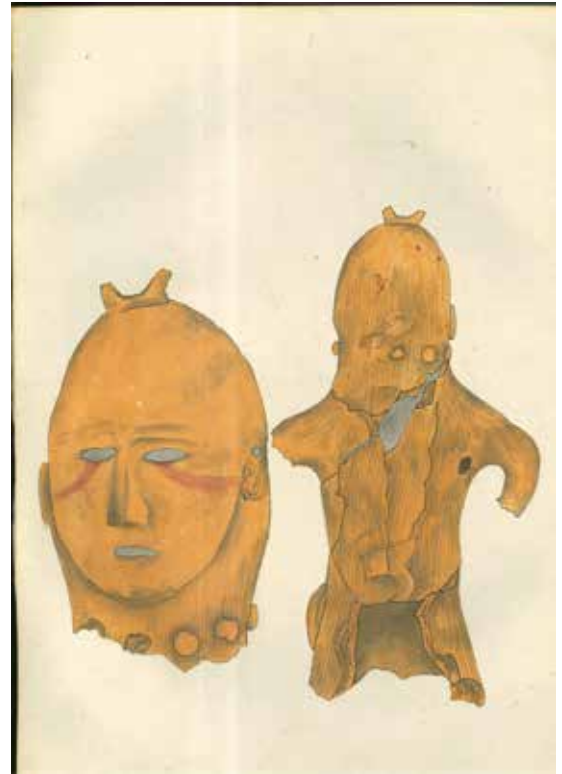


图 19 『榧園好古図譜』 第一冊 (八)



31



32



33



34

図 20 『榎園好古図譜』第一冊 (九)



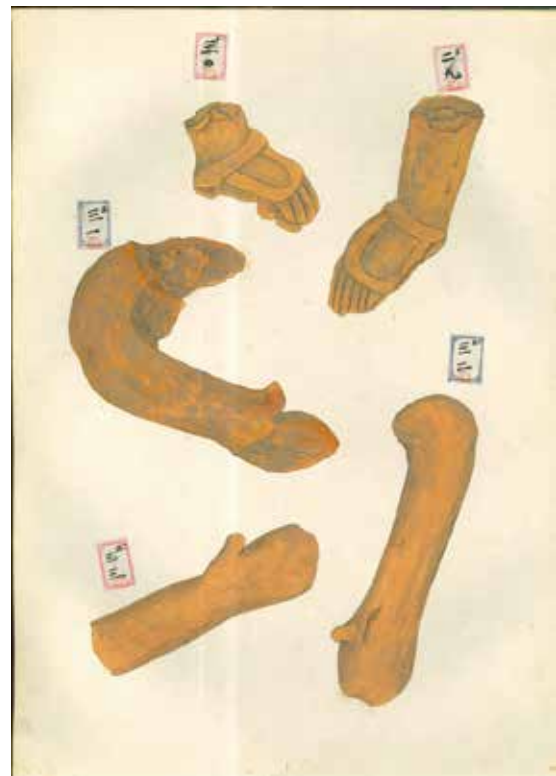
35



36



37



38

图 21 『榷園好古図譜』 第一冊 (十)



39



40



41



42

图 22 『権園好古図譜』第一冊 (十一)



43



44



45



46

图 23 『榷園好古図譜』第一冊 (十二)



47



48



49



50

图 24 『榧園好古図譜』 第一冊 (十三)



51



武蔵國播羅郡柿治村
明治元年十一月編得十二月十五日
同村四十一兵内兵所贈

52



馬具破片大谷村
串引花ノ木兩字
所獲

53



54

图 25 『榎園好古図譜』 第一冊 (十四)



55



56



57



58

图 26 『榷園好古図譜』 第一冊 (十五)



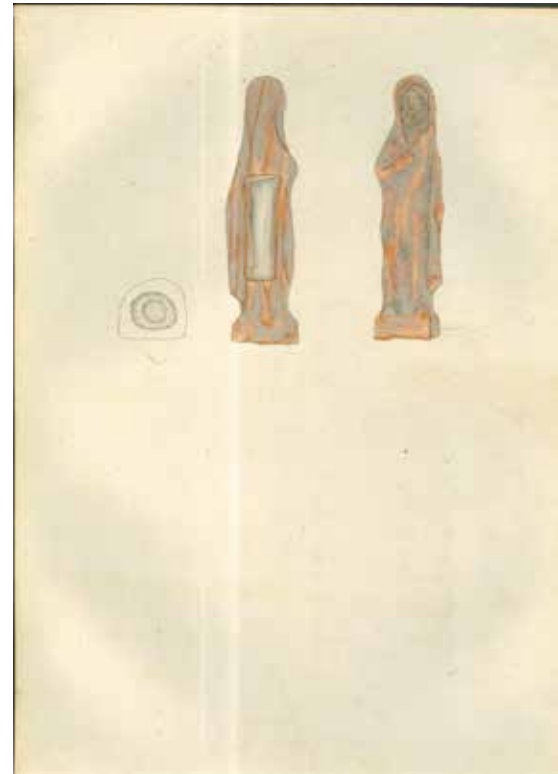
59



60

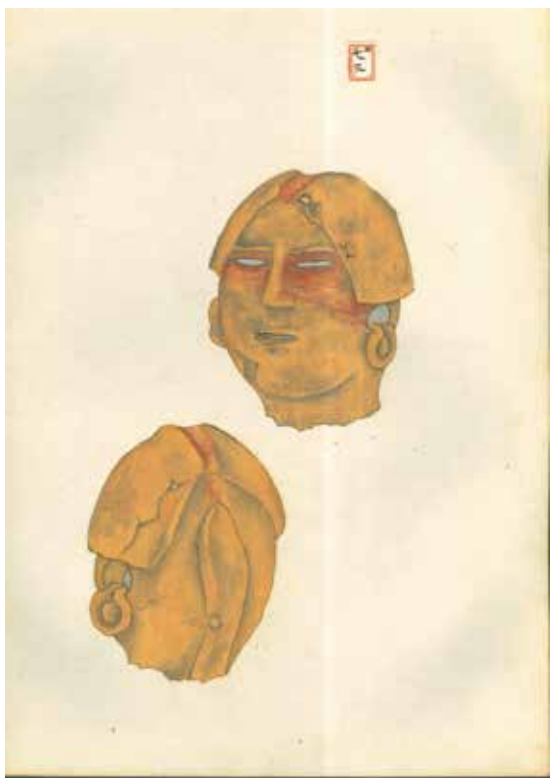


61

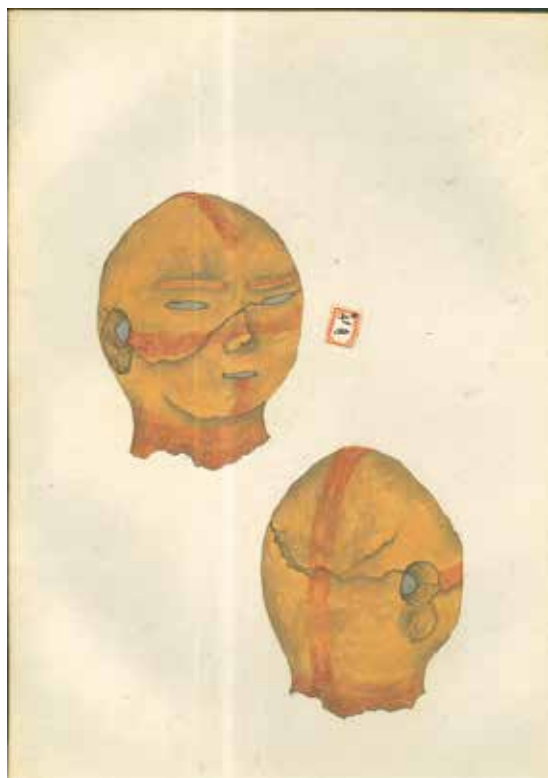


62

图 27 『榷園好古図譜』第一冊 (十六)



63



64



65

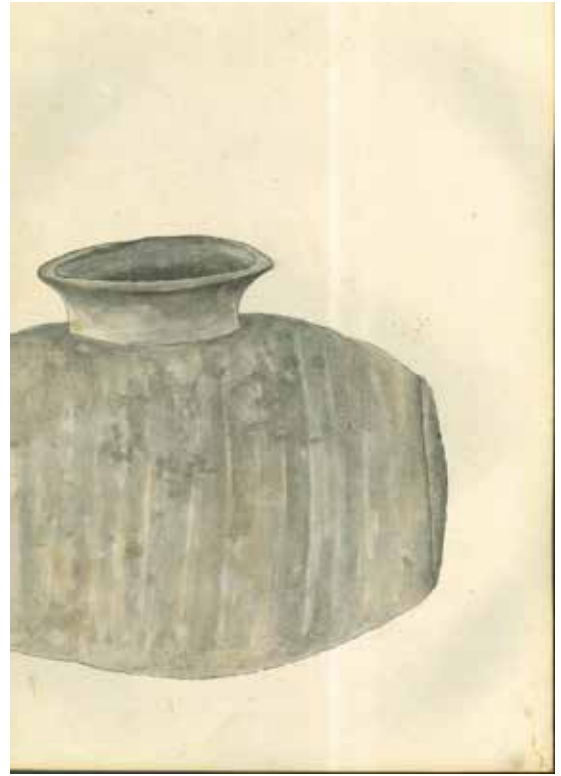


66

图 28 『榷園好古圖譜』第一冊 (十七)



67



68



69



70

图 29 『榷園好古図譜』 第一冊 (十八)



71



72



73



74

图 30 『榷園好古圖譜』第一冊 (十九)



75



76



77



78

图 31 『榷園好古圖譜』第一冊 (二十)



79



80



81



82

图 32 『榷園好古圖譜』第一冊 (二十一)



裏表紙

図 33 『権園好古図譜』 第一冊 (二十二)



武藏國北埼玉郡上中條村掘地所獲
明治九年十二月二日

1~4 短甲武人埴輪 (鹿那祇東古墳)



1~4 短甲武人埴輪 (東京国立博物館蔵)



5~7 武人埴輪頭部



根岸家蔵



11・12 人物埴輪女子頭部



根岸家蔵



14 馬形埴輪



馬形埴輪 (東京国立博物館蔵)



15・16 武人埴輪頭部 東松山市三千塚古墳群出土資料 (東松山市教育委員会蔵) 註11文献より



図 34 『榎園好古図譜』第一冊所収の埴輪と遺跡出土資料 (1)



23 人物埴輪女子



埼玉県立歴史と民俗の博物館
保管資料 註13文献より



27 人物埴輪男子



東松山市教育委員会
所蔵資料 註14文献
より



31・32 人物埴輪男子頭部



38 人物埴輪部分



45 人物埴輪胴下半部



埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料
註15文献より



41・42 人物埴輪男子頭部

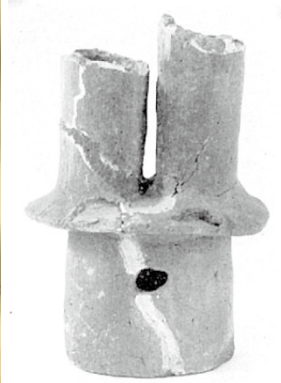


埼玉県立歴史と民俗の博物館保管
資料 註16文献より

図 35 『榎園好古図譜』第一冊所収の埴輪と遺跡出土資料 (2)



47 人物埴輪脚部



埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料
註17文献より



47 人物埴輪脚部



東京国立博物館所蔵資料 註19文献より

図 36 『権園好古図譜』第一冊所収の埴輪と遺跡出土資料 (3)



49・50 馬形埴輪



東京国立博物館所蔵資料 註20文献より



54 埴輪片 鈴 東京国立博物館所蔵資料 註21文献より



62 テラコッタ人形 (ギリシャ)



根岸家蔵 (H. v. シーボルト寄贈)

図 37 『榎園好古図譜』第一冊所収の埴輪・土製人形と遺跡出土資料



67 須恵器 横瓶 根岸家蔵



67・68 須恵器 横瓶 根岸家蔵



70 須恵器 壺 根岸家蔵



74 須恵器 壺



根岸家蔵



72 須恵器 長頸壺 根岸家蔵



75 須恵器 高坏坏部



根岸家蔵



81 土師器 坏



根岸家蔵



76 土師器 高坏坏



根岸家蔵

図 38 『榎園好古図譜』 第一冊所収の土師器・須恵器と遺跡出土資料 (1)



79 土師器 小壺



根岸家蔵



80 土師器 埴



根岸家蔵



80 手捏土器



根岸家蔵



80 手捏土器



根岸家蔵



77 重圏文鏡



根岸家蔵



77 鏡形石製品



根岸家蔵



78 勾玉形石製品



根岸家蔵

図 39 『榎園好古図譜』 第一冊所収の土師器・須恵器と遺跡出土資料 (2)

船木遺跡出土「田村墨書須恵器」について

新井 端

はじめに

1878（明治11年）5月、当時の大里郡吉見村船木字雷で発見された一群の出土遺物の中に「田村」の墨書文字の書かれた祝部土器があった。この記録は明治12年頃に作成された「吉見村誌」に綴られた出土遺物を描いた彩色図である（文1）。

絵図に描かれたこれらの土器は、後に青山の素封家で政治家であり好古家としても活躍した根岸武香（文2）の所蔵品に加えられ、他の収集品とともに根岸氏の設置した私設博物館というべき古器物陳列室に収められていたことが『東京人類学会雑誌』に報告されていた（文3）。

当時、祝部土器と呼ばれた資料は現在の考古学上の用語では「須恵器」としており、主に古墳時代から平安時代間に作られ全国の古墳や集落跡、生産遺跡の窯跡などから数多く発見される。明治期の土器区分でも土師器と須恵器は明確に区別されており、彩色図では土師器類は褐色に、須恵器は灰色に色分けされている。この須恵器に墨書で文字を書いた「墨書土器」は、木簡や漆紙文書に書かれた文字と同様に希少な出土文字資料として古代史研究上の必須史料となっている。

船木遺跡発見の墨書土器は、明治初期の考古学黎明期に最初に発見・報告された資料に相当し、史料的にも研究史的にも価値が高い。このことは既に、宮瀧交二により「田村墨書は墨書土器の最初の発見」との報告がなされている（文4）。しかし、残念なことに現資料の墨書土器は宮瀧報告以前から所在不明となっており現品を確認することはできない状態が続いていた。筆者は熊谷市史考古編の編さん後も根岸家資料の再確認調査（文5）を続けるなかで田村墨書土器を再発見することができた。今回、國學院大學博物館学研究室による近代博物館形成史研究会の調査も進められることから本誌への報告とさせていただいた⁽¹⁾。

1. 「田村墨書須恵器」について

吉見村誌「田村」墨書土器は、『吉見村誌』に描かれた図（図40-1）が最初の報告で、図には「字雷船木山下 明治十一年五月廿五日掘地所獲 大サ如図」と標記され、数点の土器などが一括して描かれている。土器についての説明はないが、本土器の傍らには「皿」の註記が書かれていた。展開図状に3方向から描かれた図は、以下の須恵器杯の特徴をよく捉えている。

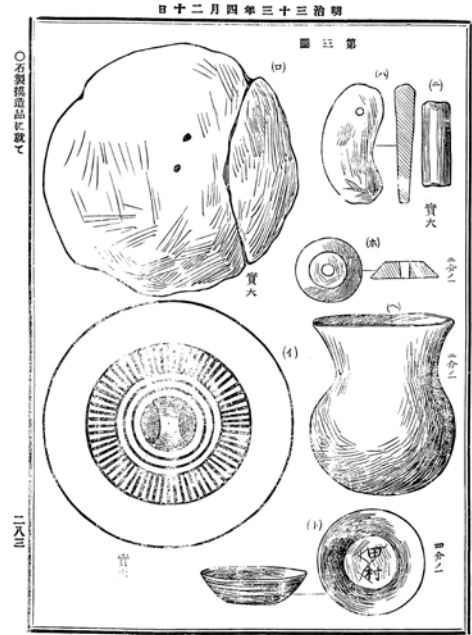
- ① 完形の坏型土器であること
- ② 灰色を主体とした色調をしていること、
- ③ 底部の渦状の表現は回転糸切痕を示すこと
- ④ 内底面に田村の墨書を縦位に記していること（図41）
- ⑤ 体部外面には「田村」の墨書を縦位に記すが口縁に対して倒置させていること（図41-6）
- ⑥ 字画が途切れている表現は墨の濃淡（かすれ）を観察していると思われること

上記の観察からこの土器は古代の須恵器と気付く。とくに「田村」の文字は現品と見比べるとよく似せているようだ。他の土器類も確認された現品との判別が容易であり、よく特徴を捉えるなど優れた観察者の視点で描かれている。『吉見村誌』では墨書土器について直接の説明を欠くが、本図で注意されることは、墨書は杯の側面と内底面の2か所の表記であり、底部外面（糸切底）には墨書の表記は認められないことである。

東京人類学会雑誌 1900（明治33）年に刊行された『東京人類学会雑誌』第169号では「石製模造品



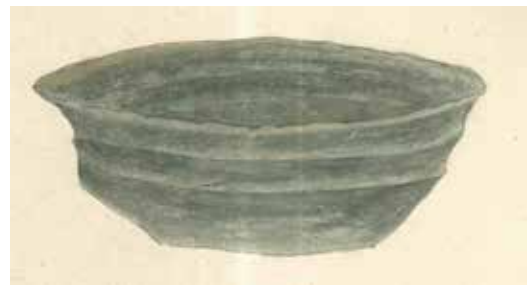
1 「吉見村誌」に綴られた「田村墨書須恵器」の彩色図
3方向より描かれている



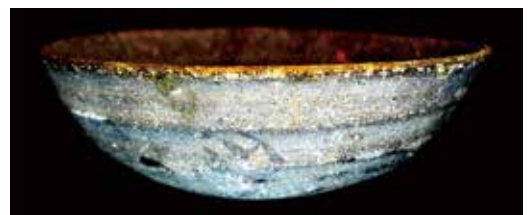
2 「人類学会雑誌」第169号に掲載された船木遺跡採取遺物（文3より転載）



3 「権園好古図譜」に描かれた船木遺跡採取遺物、彩色図に注記はなく、墨書の表現も見られないが上段の灰色土器が「田村墨書須恵器」と想定される。
4は図より抽出拡大した。



4



5

5 田村墨書須恵器の側面写真 4図の左側面の張り出しが異常。大きな歪みを表現したとすると別物の可能性もある。

図40 田村墨書須恵器の掲載図

について」の節で大野延太郎が「田村」墨書土器を図示し(図40-2)、別記に「祝部土器の皿(内外墨を以て二個所に田村の二字記さる)」との説明を加えている。また、1903(明治36)年刊行の同書第207号では、柴田常恵が根岸武香の收藏品を紹介した「図版考説」のなかで「田村」墨書土器を再確認している。図40-2は「田村」墨書土器を古代の遺物として学術的に報告した最初の記録となり、図の内底面に墨書文字「田村」が表記される。無台の坏型土器で奈良・平安時代の須恵器坏に表現されている。

宮瀧交二報告 宮瀧論文では前掲の文献を踏まえ、より詳細に墨書須恵器の実態を想定している(図41)。宮瀧は東京人類学会雑誌の挿図からそれが3分の1縮尺であることから、口径約12cm、底径6cm、器高2.8cm以上と可能の限り想定を試みている。器形底径の比率は口径の2分の1程度と認め、底部調整が回転糸切りである点などから鳩山窯跡群の時期変遷にあてはめ、8世紀末から9世紀前半(鳩山編年の第Ⅲ期~第Ⅳ期に相当か)と位置付けている。また、この報告の意義を墨書土器研究の学史的な点と好古家の業績の点からも評価しており、その後の根岸家の果たした考古学研究上の貢献を明らかにしていく上で重要な報告となっている。

実際の田村墨書須恵器 田村墨書須恵器の再発見により現品を確認することができたので、本文では実測図を作成し写真とともに掲載した(図41・図42)。資料名を「船木遺跡出土田村墨書須恵器」としておく、属性等の観察結果は次のとおりである。

- ① 器種は「坏」で完形、完存。ロクロ巻き上げ成型、底部は回転糸切り離し無調整。口径12.2~12.4cm、器高3.7~4.0cm、底径5.6~5.8cmを測る。体部上半のロクロ目がやや強く稜線状となる(図42)。
- ② 色調 黒灰色(Hue7.5Y6/1、HueN5/: 標準土色帖)
発見時はリング箱に他の船木遺跡出土土師器類とともに無梱包状態で取められていたためか、燻べたような深い黒灰色を呈し墨書の確認は難しかった。塵埃を払い、かろうじて墨書が認められ、赤外線撮影で字画を確認した(図41-2)。墨書は2か所、体部横位と内底面に「田村」墨書が認められた(図41-1)。いずれの墨書も隸書風の字画で、一部が不明瞭だが「村」の終筆の点を巻き込むように書く特徴がみえる(図41-2・4)。この墨書文字は似通っており内外面とも同筆であろう。
- ③ 胎土 白色針状物と砂粒がやや多く、3mm大の小石も含まれるため精選された胎土とはいえないが、南比企窯跡群での生産品と考えられる。焼成は良好で、内底面に焼き歪のためか亀裂が四方に入っている(図41-2)。
- ④ 時期比定 器形および手法・胎土の特徴から、類型を南比企窯跡群の製品に認め、渡辺一による鳩山編年のⅧ期に相当すると考えられる(文6)。年代的には9世紀第3四半期から第4四半期に収まるだろう。

なお、収納に使われたリング箱には1956(昭和31)年の新聞が敷かれており、その当時に納めたまま70年近く蔵内埋蔵されていたことになる。この再発見により船木遺跡の採取遺物はほぼ揃うこととなった⁽²⁾。

2. 出土地点に関して

船木遺跡の概要 『吉見村誌』・『東京人類学会雑誌』の挿図(図40-1・2)には「田村墨書土器」とともに出土した遺物として、①【重圏文鏡1面、②土師器埴型土器5点、③鏡型石製模造品1点、④石製曲玉1点、⑤石管玉1点、⑦石白玉(紡錘車か)1点、⑧陶管玉(土錘)5点、⑨皿(田村墨書須恵器坏)1点】等が描かれる。これらの資料は⑧と⑨を除くといずれも古墳時代前期の資料としてよいものであり、⑨の須恵器坏のみが奈良時代末から平安時代に属する資料である。

これらの遺物が一括で発見される船木遺跡とは大里沖積地に張り出した江南台地の東端部に位置し、縄



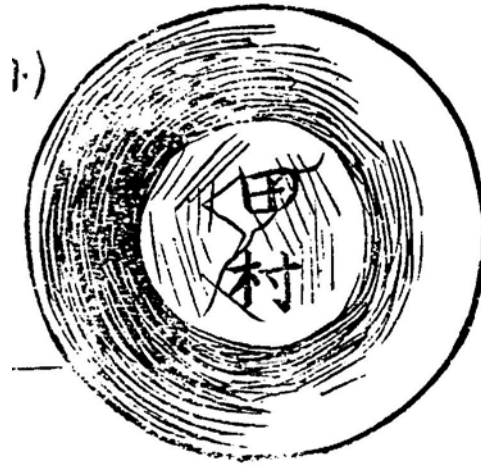
1



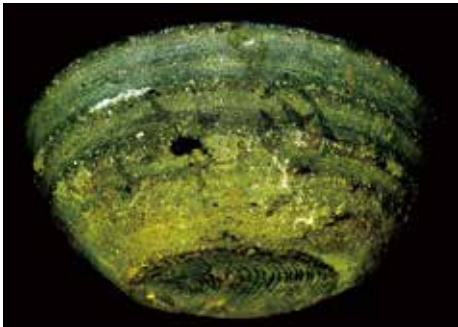
4



2



5



3



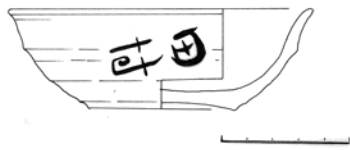
6



7

- 1-内定面 2-内底面拡大
- 3-体部外面
- 4・6-「吉見村誌」挿図転載
- 5・7-「東京人類学会雑誌」挿図転載

図41 「田村墨書須恵器」の写真と模式図



- 弥生時代中期後半の遺構
- 弥生時代後期後半の遺構
- 古墳時代・奈良～平安時代及び時期不詳の遺構

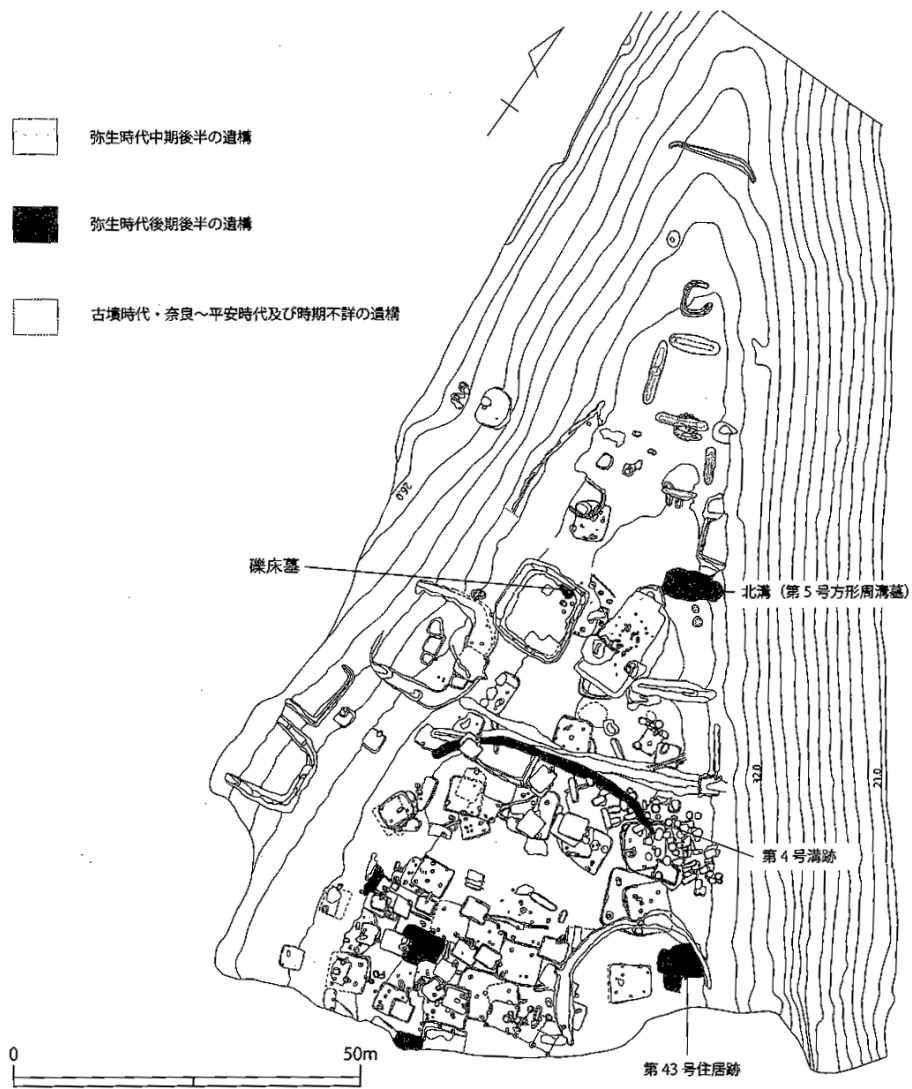


図 42 「田村墨書須恵器」実測図・船木遺跡発掘調査区全体図 (文 2)

文時代から各時代の集落や古墳群が確認されている。平成期に入り大規模な土地区画整理により大里南部遺跡群のまとまりで発掘調査が行われた。

発掘後の船木丘は全く消滅しているが、縄文～弥生～古墳～古代の集落跡、墳墓群が確認されている。発掘調査全体図（図 42）に見る通り、かつての丘は北東方向に舳先を向けた大型船のような地形をしており、両側は急斜面となっていた。

この船木丘に艦橋のように建てられた社殿が本殿と拝殿からなる移転前の船木神社であり、丘を回り込んだ西側の斜面に位置する急勾配の石段が参道となっていた。社殿は西面し、拝礼者は春秋の日出に包まれた神霊に向き合う形を採るなど東方を意識した立地となっていた。移転先に新造された新船木神社には明治期の修造を記念した石碑も移転されており、根岸武香の撰文によって「會堀丘麓獲鏡玉瓶瓮是古之祭器也」の遺物発見の一文が記されている。この碑文は 1878（明治 11）年の『吉見村誌』の遺物発見時から 16 年後の 1894（明治 27）年時であり、前者では「船木山下」、後者では「堀丘麓」となって、雷（船木）丘の山下や麓を掘って遺物を得たとしている。

この表記にはやや注意が必要なので少し考えてみたい。船木神社は船木丘の頂きの平坦部に位置しており明治期の改修時から平成の移転まで原位置を変えてはいなかった。社殿は西側から急勾配の石段を上った正面に拝殿本殿が建っていた。改修碑文によると「祠又頽矣」の状態から「廟貌潔清明」に修造したとされており、社殿の修造ならば丘上での作業が不可避のため出土地点の可能性としては船木遺跡の本体である丘上以外ないと思われる。両記録のとおり船木丘の麓からの発見とする場合、麓を掘る必要は参道の階段を作る西側以外ない。丘の東・西側も急崖であって遺跡の所在にはかなり無理がある。なお、東側低地部分は船木山下遺跡とされるが発掘調査では中世期が主体であった。

図 42 は狭長な船木丘に現れた発掘調査後の遺構平面図で、弥生時代中期後半から古墳時代前期と古代の遺構が重なり合っていた。礫床墓、竪穴住居跡、方形周溝墓、環濠と推定される溝、船木神社の下層遺構（図中の鳥居記号の位置）などの遺構が多量の出土遺物とともに確認されている。『吉見村誌』に記された「重圈文鏡、土師器埴型土器」等の遺物は、丘上に現れた船木遺跡本体からの出土品としても矛盾はない。社殿の位置には礫床簿の主体部、方形周溝墓の一部、古代竪穴住居跡の一部が重なっている。発掘調査の結果から示された遺構の状況から前記遺物の実際の出土場所は丘上である可能性が高い。

船木丘の東方眺望下に広がる沖積地の開拓が始まった弥生時代から方形周溝墓が作られ集落が拡大していく中、古代以降中世期までには低地に生活の場が下りてくる。この変遷に歩調を合わせ、丘上は聖域化し、社殿が形作られていったのだろう。船木の丘は東京湾から荒川を遡上して到着した船着場（船木＝船来）の一か所という歴史性を持つと考えられ、古代の竪穴住居跡から「東」墨書土器の出土があり、日の出の方向とともに船の寄り来る方向として「東方」が強く意識されたように感じられる。

3. 「田村墨書須恵器」の語るもの

「田村」表記の墨書は、明治大学日本古代学研究所の「全国墨書土器・刻書土器・文字瓦・横断検索データベース」によると、船木遺跡を始め、いずれも集落跡と推定される 5 遺跡 6 例が知られる。ほぼ字画を遺す例は「溝口遺跡（兵庫県加古川市）」の須恵器坏底部に書かれた「田村南」（8 世紀代）と「西木之部遺跡（兵庫県丹波篠山市）」の須恵器坏外面横位に書かれた「田村」（11～12 世紀代）がある。他は「世継遺跡（滋賀県米原市）」、「柿田遺跡（岐阜県可児市）」、「西木之部遺跡（前出）」の別資料の 3 例は「村」の字画の一部を欠損している。文字の内容については地名と考える余地もあるが不明と言わざるを得ない。出土遺跡の性格や時代性からその意味を多面的に考えなければならないだろう。

墨書土器は神仏に対する祭祀・儀礼的との関わりを考える研究（文 7）や、集落出土資料に限っては村落内の祭祀に注目する方向性（文 8）も示されている。吉祥的な文字である「富 吉 徳 福 万 財

田 稲」など出土例は多く、米穀を中心とする社会においては「富貴」「財福」を意味するとされるこれらの文字は、農業生産物の豊穰や農業経営における富の蓄積を願うものと考えられている（文9）。熊谷市域でも北島遺跡・下田町遺跡・諏訪木遺跡などで多数の出土例を見ることができ（文10）、生業に直結した祭祀が行われたと考えられる。

なお、「田」は「富」「福」にも「田」を含むことから、「田」一文字にも富貴財物 財田得富（文9）の意味を持つと考え、「田村」は「豊かな村」を願う予祝的な祭祀での使用を考えたい。但し、「田人」「田部」「田力」「田坏」など他の「田」の用語とも総合的に検討する必要があると考えるが今後の課題としたい。

古代農村では農繁期の労働作業に伴う大規模な飲食儀礼の存在が想定されており、この儀礼の実施に際し使用する飲食器として「田坏」200口が用意された例なども知られており（文11）、神への供献と集落（村）の人々との饗応（共同体飲食）の実態が想像されている。農作業の一大行事である田植や刈入れなどでは労働力を集中して行う作業などに際して、またその後の収穫祭に当たる「新嘗」の祭は集落を挙げて挙行されたと考えられる。饗応や祭祀に使われた坏はそのまま各自に、或は各戸に分配されて集落の住居跡にもたらされるのだろう。

結語

根岸家資料の多くは江戸時代末から明治時代にかけて、根岸友山・根岸武香父子の好古趣味にもとづき蒐集を意図した古文書・書籍・絵画・古銭・考古資料などの歴史資料と家伝の調度品・工芸品などの残された生活資料がある。さらに、根岸家の経営や家産に関する道具類・文書類や私信・図書なども多量に保存されている（文17）。父子の没後も遺志によって古文書類と書籍資料の多数は昭和初年までに帝国図書館（現国会図書館）に寄贈され（文12）、考古資料の一部も国・地方の博物館等に寄贈・寄託されている（文14）が、近世～近代期の諸記録類もなお整理の途上である（文15）。

このような状況を見ると、未だ、根岸家資料の総合的な把握は根岸の収集目的と遺跡および資料の保存活用の視点からも途半ばであるように思われる（文16）。筆者は以前から根岸家資料の主要な収集資料の一部を占める考古資料について考究してきた（文13）が、未確認だった資料の所在を再確認できるなど驚きの発見が相次いだ⁽³⁾。引き続き根岸家の理解を得て好古家の文化財保護に果たした仕事を考えてみたいと思う（文18～21）。文末になりますが、毎回の調査に多大のご理解をいただいております根岸家の皆様には深く感謝いたします。

註

- (1) 再発見の契機は2021（令和3）年9月の調査に際し、蔵の一部に据えられた多量の図書が詰め込まれた戸袋を覗くと、その台に当たる部分に使用されたリンゴ箱に多量の埴輪片・石器類が一括納入されていた。現当主の根岸氏も全く知らない場所から出てきた遺物群は東松山市三千塚古墳群より採取された埴輪片と船木遺跡の採取品・他だった。
- (2) 土器類の再発見前の訪問調査次に、土器類とともに発見されたとされる船木遺跡出土の「重圏文鏡」が、こんなものもあるよとの御当主の言葉とともに、各種の金属製品を納めた手文庫からひょっと取り出された。居合わせた者は驚嘆し、呆れるほかはなかった。幾許もなく、鏡と土器類の両者が見いだされ明治期に採取された船木遺跡出土資料はほぼ揃うことになった（徳田誠司2022「根岸武香旧蔵の「重圏文鏡」について」『人文資料形成史における博物館学的研究Ⅰ—根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開—』近代博物館形成史研究会）
- (3) 根岸武香が蒐集資料の図譜作成を行ったことは、これを実見した柴田常恵や金井塚良一の記録から知られていたが、実物は根岸家から出た後は所在不明となっていた。ところが突然に彩色され、あ

るものは実大に、縮尺を分かった彩色図譜が國學院大学図書館により発見された。図譜には案に相違せず、多量の考古遺物が記録されており、遺物の多様さと描画の細密さに驚嘆の一語であった。今後、掲載遺物の検討がなされることで好古家根岸家の主要蒐集品を知ることができるだろう。この図譜は根岸武香の雅号をとって『榎園好古図譜』と呼び扱うこととなった。

- (4) なお、図譜には船木遺跡出土品も『吉見村誌』に描かれた形と同様な模写で掲載されていた(図 40-3)。出土地などの一括性をもって描かれているところから、田村墨書土器は図 40-4 が該当すると思われる。但し、田村墨書の表記は認められないので想定に過ぎないかもしれないが、図譜作成時には墨書が見にくかったことも考えられようか。なお、同図は内川隆志教授の好意により掲載させていただいた(内川隆志 2022『人文資料形成史における博物館学的研究 I ー根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開ー』近代博物館形成史研究会)。

参考文献

- 1 埼玉県立図書館所蔵 1879(明治12)年ころ「村誌 大里郡青山村」『武蔵国大里郡吉見村誌』
- 2 新井 端 2015「熊谷の考古学研究の歩み」『熊谷市史 資料編 1 考古』
- 3 大野延太郎 1900「石製模造品について」『東京人類学会雑誌』第169号
柴田常恵 1903「図版考説」『東京人類学会雑誌 ー 根岸武香追悼号 ー』第207号
- 4 宮瀧交二 2006「武蔵国大里郡大字青山小字雷発見の「田村」と記した祝部土器ー明治十一年発見の墨書土器についてー」『埼玉の考古学 II』
- 5 新井 端 2015「青山根岸家資料報告(1)ー考古資料・古瓦ー」『熊谷市史調査報告書』第1集 熊谷市教育委員会
- 6 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群 II』鳩山町教育委員会
- 7 平川 南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 8 高島 英之 2000『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 9 三上 喜孝 2013『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館
- 10 埼玉県立文書館編 2011「埼玉県内出土の墨書土器・刻書土器・文字瓦集成」『埼玉県資料叢書 II』
- 11 義江彰夫 1979「律令制下の村落祭祀と公出挙制」『歴史学研究』380
「天平勝宝七歳五月三日 越前国司等解」 田坏二百口
「天平勝宝九歳二月一日 越前国田使解」 田坏二百口 東大寺領越前国桑原莊巻 新日本古典籍総合データベース
- 12 帝国図書館編 1935『帝国図書館所蔵甲山文庫和漢図書目録』
- 13 新井 端 2021「上中条出土人物埴輪群像」についてー人物埴輪野イコノグラフィーー」『熊谷市史研究』第13号
- 14 金井塚良一 1983「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10
- 15 埼玉県立図書館編 1967『武蔵国大里郡甲山村根岸家文書目録』近世史料調査報告 2
- 16 埼玉県立文書館編 1984『根岸家文書目録』復刻 熊谷市史編さん室
※寄託された追加文書資料を整理中
- 17 大沼宣規 2013「ある好古家のコレクション ー根岸武香と甲山文庫ー」『国立国会図書館月報』No.620
- 18 新井 端 2019「好古家根岸武香の文化活動とその交流ー小杉榎邸手記『千とせのあき』からー」『熊谷市史研究』第11号

- 19 新井 端 2016 「村岡高雲寺所蔵の古墳時代遺物について」『熊谷市史研究』第8号
- 20 新井 端 2020 「青山根岸家所蔵「本村型琴柱形石製品」について」『熊谷市史研究』第12号
- 21 新井 端 2021 「國學院大學博物館蔵「六鈴鏡」—根岸武香—遺愛の鈴鏡について—」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』IV 近代博物館形成研究会

令和4年度 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究C 課題番号21KK01002
(研究代表：内川隆志)

人文資料形成史における博物館学的研究Ⅱ 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開

令和5年2月28日発行

編集 内川 隆志・鳥越 多工摩
連絡先 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大學博物館学研究室
印刷 ヨシミ工業株式会社

